

---

# BREAKDOWN

山口多聞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BREAKDOWN

### 【Nコード】

N4917A

### 【作者名】

山口多聞

### 【あらすじ】

黒の組織科学部門において研究が続けられていたAPT-X。ところがそれが研究員のミスで外部に流失。さらにその薬をあの人が飲んでしまう。ここに組織との戦いが始まった。

## 始まりは突然に

この話での主な登場人物

工藤新一（江戸川コナン） ご存知名探偵コナンシリーズの主人公。

毛利蘭 上記人物の幼馴染でGF。

毛利小五郎 蘭の父親。

黒羽快斗 ご存知まじっく快斗シリーズの主人公。

中森青子 上記人物の幼馴染でGF。

服部平次 ご存知西の名探偵。

遠山和葉 上記人物の幼馴染でGF。

冬のある日の米花町毛利探偵事務所

この日、東京都米花市米花町は平和であつた。ここ一週間ほど目だつた事件は特になく、名探偵が活躍する余地はこれっぽちもなかった。

黒の組織によつて体を小さくされ、今は江戸川コナンとして幼馴染の毛利蘭の家である

毛利探偵事務所に居候する工藤新一も、久しぶりに訪れた静かな一週間のんびりと過ご

していた。だが、時に不気味な静けさは嵐の前の静けさとも言われる。そう、嵐は突然彼

に、いや彼の周りに吹き荒れる事になる。

「ただいま。こほんこほん。」

帰つてきて事務所のドアを開けながら、蘭はひどい咳をした。

「おかえり、蘭姉ちゃん。どうしたの、風邪？」

ソファーに寝転がって本を読んでいたコナンは、起きあがつて彼女を見ながらそう言つ

た。

「うん、ちょっと。学校で誰かに移されたみたいで、こほんこほん。」

そう言うなり、再び咳をする蘭。

「おい、大丈夫か蘭？風邪薬飲んでおけよ。」

机に座つてのんきにテレビを見ていた父親の小五郎も、心配そうに蘭に声を掛けた。普

段は自堕落な生活を送っている彼も、さすがにこういう時は父親である。

「うん、わかつてる。今丁度風邪薬買つてきたから。」

そういつて、蘭は机にビニール袋を置き、中から未開封の風邪薬のビンを出した。

「あれ、それいつも買ってくるやつと違うんじゃない。」

コナンがビンを見ながら言った。さすが、中身は東の高校生探偵とあって、細かい所まで注意がいく。

「うん、薬屋さんに行ったら丁度安売りしていたの。」

そう言いながら、蘭はビンのキャップを開き、同封の説明書を軽く読んだ。そして中から薬を取り出した。

彼女の手にはカプセル錠が一つ、納まっていた。

その錠剤を見て、コナンは再び違和感を覚えた。

「あれ、その薬カプセルなんだ。めずらしいね。」

「うん、薬屋の人は最近出た新製品で言ってた。食前食後に関係なく飲めて、一粒で良い

んだって。けど確かに変わってるよね、作ってる会社名、ヤタガラス製薬だって。」

そういつて、彼女は薬の瓶が入っていたケースをコナンに見せた。確かに、黒い烏をあ

しらったシンボルマークが描かれていた。

「蘭、そんなガキの相手なんかしてないで、さっさと飲んじまえよ。」

小五郎がせかすように言った。

「わかってるわよ、そんなにコナン君を邪見しなくなっただけじゃない。」

そうぶつくさ文句を言いながら、彼女はカプセルを水で流し込んだ。

一方、コナンは風邪薬のカプセルを見ながら考えていた。

（このカプセル、なんかA P T X 4 8 6 9 に似ているような。・・・

まさかな、カプセルな

んで皆同じ様なもんだし、だいいちこいつは市販の薬だ。そんな訳あるはずがない。）

コナンを自分が考えたことの馬鹿らしさに苦笑した。だが、コナンの予感是最悪の形で当たってしまうことになる。

五分程して、蘭が胸を手で押さえながら急に座りこんでしまったのだ。

「蘭姉ちゃん!!」

「蘭!!」

コナンと小五郎の二人が直ぐに蘭に駆け寄る。その顔色は悪く、息も荒い。

「おい、どうしたんだ蘭!!」

「蘭姉ちゃんどうしたの、大丈夫!!」

「あんまり、大丈夫じゃないみたい。」

コナンと小五郎の問いに対し、蘭はそう弱々しく答えた。そして、自分の様態を二人に言う。

「体が熱い。まるで、溶けていくみたい。」

その言葉に、コナンの脳裏に強く思い出される物があった。

（体が熱い？体が溶けるみたいだって？）

彼の脳裏に、あのトロピカルランドでの悪夢がよみがえる。ジンにAPTX4869を飲まされ、体が幼児化していく中で彼もその苦しみを感じていたことを。

（まさか、あの薬!？）

コナンは机の上にある風邪薬の瓶を見た。あまりにバカバカしいと自分自身で苦笑した

さっきの考えが現実味を帯びる。

（けど、なんで？）

彼が思考を巡らせようとした時。

「おい!コナン、何ぼけつとしてるんだ。早く救急車を呼べ!!」  
小五郎のその言葉に、コナンは我に返った。蘭を見てみると、体

から湯気みたいな物が  
立ち上っていた。

しかしコナンは小五郎に言われた119番に電話もかけず、彼女のそばに掛けよった。

結果的にこれが後々役に立つことになる。

「オイ、蘭！」

コナンが叫ぶ。だが

「アアアアアアア！」

蘭はそう叫んで、完全に気を失ってしまった。そしてその直後、コナンにとっては見た

くもなかった、小五郎にとっては信じられないような光景が、彼の眼前で起こった。蘭の体がそれこそあつという間に小学生低学年レベルまで小さくなってしまったのだ。

「な、なにiiiiiiii！」

叫び声を上げる小五郎。そして、  
ボタン

彼は失神してしまった。（多分本物は失神はせんでしょう）

「お、おっちゃん！」

コナンは驚いて声を上げたが、直ぐに彼がただ気絶しただけとわかると、とりあえず彼をほつといて（ひでえ）、蘭を担いで上の階にある蘭の寝室まで運んで寝かせたのであった。

「畜生！なんでこんなことに。」

気絶している蘭を見下ろしながらコナンはそう言った。だが、彼は数時間後さらなる衝

撃を受けることになる。それは大阪の服部平次からのメールだった。

（おう工藤！なんややつかいなことになったで。実は和葉と俺風

邪気味だったんで買って  
きた薬飲んだら体が小さなってもうた。オカンにはなんとかばれて  
へんから今から和葉と  
そっち行くでよろしくたのむわ。）

このメールを受け取った時、コナンは気が遠くなりそうになった。  
「一体何が起きているんだ!!」

コナンの叫びが米花町に木霊した。しかし、彼は知らなかった。  
米花町から少し離れた江古田町で二人の男女が同じ事になっている  
のを。

「ねえ快斗、どういうことよ。なんで私達小さくなっちゃてるのよ  
!」

中森青子が叫ぶ。

「俺が知るか。全く風邪気味だからって、青子と一緒に風邪薬なん  
か飲むんじゃないかった。」

叫ばれた方。黒羽快斗は溜め息をつきながらそう言った。しかし、  
そこにすぎさず青子の攻撃が加えられる。

「何よ!バ快斗。まるで私のせいみたいじゃない!」

「だあ、うるさい。誰もそんなこといつてねえだろ!とにかく米花  
町に行くぞ!」

快斗の急な提案に青子は戸惑う。

「え、何で米花町に?」

「ついてこりゃ判るよ。（米花町には先にこんな風になっちゃまった



奴がいるからな」

こうして二人は米花町へ向かった。  
役者は揃いつつあった。

第二話に続く。

というわけで始まり始まり。

## 前日の出来事

### BREAKDOWN

新たな登場人物（全員オリジナルキャラです）

本山幸平 黒の組織日本支部科学部門のダミー会社、ヤタガラス製薬主任。宮野志保脱走後壊滅状態にあった同部門の再建のためロシア支部より回された。

津島卓也 上記会社の社長兼所長。英国から派遣されてきた。

鵜沼新平 上記会社の社員。独逸からの派遣。

第1話の前日 都内某所

都内某所に、特になんの変哲のないビルがあった。そして、そのビルにはヤタガラス製薬という製薬会社が入っていた。

「おはよう。」

ビルの一室、製薬会社の部屋に、一人の男が入ってきた。

「あ、本山さん。おはようございます。」

中にいた男が、本山と呼んだ男に答える。

「ああ。まだ鵜沼しか来てないのか？」

「いいえ、津島所長はもう来てますよ。さっき外にコーヒーを買いに行きました。」

本山は自分の机に鞆を置いた。

「そうかい。で、何か悪い情報はあったかい？」

「いいえ、何も。宮野研究員が見つかって殺されたとか、そんな事はありませんでしよ。」

鵜沼がさらりと言った。

「そりゃ良かった。」

本山は内心ほっとした。彼は以前お世話になった人の娘が組織に惨殺されてないか気になっていたからだ。

さて、先にも述べたが、実はこの会社は黒の組織が関与している。正確に言えば、この製薬会社は表の社会向けのダミーで、実際は黒の組織日本支部科学部門の研究所であった。もっとも、現在はたった5人であるが。何故か？

実は数ヶ月前、親子二代に渡って組織で研究を続けていたコードネームシェリこと宮野志保研究員が組織に反抗した挙句脱走する事件が起きた。結局、宮野研究員は捕まらず、組織は彼女の情報を秘匿するため、彼女が研究所としていた薬品会社と、その他彼女が関わった多くの施設を消し去った。加えて、彼女と関りを持っていた者にも粛清の嵐が吹きまくった。それが原因で、日本支部科学部門は大きく衰退してしまった。さらに、宮野研究員の後を追う様に、ジュネリックという若い研究員も脱走したため、日本支部科学部門は事実上壊滅状態となってしまうたのであった。最も、組織としても

やはりこの手の研究を止めるのは不都合であつたらしい。そして、やつと一ヶ月前に、他の支部から人員を回す事によつて、何とか活動を再開させたのであつた。

本山はロシア支部からの出戻りで、36歳。そして彼は依然宮野厚司博士の下で働いた経験を持っていたため、APT4869の研究続行を命令されたのであつた。ちなみに宮野志保を心配する理由もここから来ている。

ちなみに、他のメンバーも全員日本人で、現在所長兼社長である津島卓也はイギリスから。先程挨拶した鵜沼新平は独逸から。まだ出勤していない二人のうち常滑雷太はフランスから伊奈健吉はアメリカからそれぞれ引きぬかれて来ていた。そして、全員が宮野博士と面識を持っていた。そのため、本山のみならず全員がAPT4869の研究を行っていた。

この部門が現在行っている主な仕事は、先程も言つたとおりAPT4869の研究であるが、言うは易し、やるは難し。まず彼らがぶちあたつたのは予算の壁であつた。はつきり言つて、この面でこの部門は冷や飯を食わされていた。「裏切り者を出した部門に早々予算を回せるか！」といわれているようなもので、最低限の額しか付いていなかった。もつともこれは最近連続している組織の活動失敗が響いているという噂もあつた。

結局彼らは表向きの仕事に精を出さざる得なかつた。上から貰えないなら自分で稼げでる。ただ、一応組織に在るというだけで、彼ら全員頭は良い。高品質の風邪薬を作るのにそんなに時間は掛からなかつた。そして売り出した薬はなんとか彼らの財源を潤してくれた。

しかし、問題はそれだけではない。加えて実験用機器の不足も深刻だつた。多くの研究用機材が以前の研究施設ごと燃やされてしまい、満足な研究を行えない程にまでその数が減つてしまつていた。

それでもなんとか5人は機器を調達し研究を続行させた。薬のデータ自体がなんとか残されていたおかげである。そして最終的に得

られた結論は、「A P T X 4 8 6 9 は毒薬としての適性を欠いており、今後使用は見合わせるべきである。」であった。

マウスを使つての実験では、必ず数回に一回、死なずに幼児化するマウスが出た。また、今までの投与者に死亡未確認、生存の可能性ありという人物が出ていればこつ言わざるえなかつたのだ。そして彼らは組織内に配られていたA P T X 4 8 6 9 の回収を行ったのであつた。しかしこれが後に組織を崩壊に導くことになるとは、その時誰も想像できなかった。

第三話へ続く。

## 緊急事態発生！

### 新たな登場人物

常滑雷太 ヤタガラス製薬社員

伊奈正英 ヤタガラス製薬社員

### 前話の続き

「やあ、本山君も来ていたのかね。」

話し合っていた二人の背後から声が掛かる。所長兼社長の津島だ。

「あ、おはようございます。」

「おはよう。二人して何を話していたんだい。」

「行方不明の宮野研究員の事ですよ。」

津島の問いに鵜沼が言った。

「ああ、彼女の事か。全く、一体どこへ行ったのだろうかね。今のところ見つかって処分されたとは聞いていないが。どっちにしろ、本当に惜しい人材を我々は失ったよ。彼女の頭脳なら充分ノーベル賞も獲れるような研究を行えただろうに。全く運命とは非情なものだ。」

「本当ですよ。」

本山が相槌を打つ。

「しかし、彼女も本当にかわいそうですよ。あの歳で毒薬を作らされただけじゃなく、親兄弟も組織に殺されちゃ……」

鵜沼がそこまで言った時。

「それ以上言っな……！」

津島が叫んだ。

「しよ、所長。」

うるたえる鵜沼に、津島はそつと近づいて小声で言った。

「いいか、この部屋のどこに組織が盗聴器を仕掛けているのか判らんのだぞ。一応宮野夫妻の死因は事故死と言う事になっているのだ。いらぬ疑いを掛けられなくなったら、めったなことは言うんじゃない。」

「わ、わかりました。」

組織の監視はそれはもうすさまじい物であった。もし少しでも組織に反抗的なところを見せると、直ぐに監視役の人間がやってくる。そして一步間違えると直ぐに肅清の対象になり、最終的に殺される。しかも、証拠も残さず。ここまで来るとソ連のチェイカーがナチスのゲシュタポ（前者はソ連共産党、後者はナチス独逸の秘密警察）なみにすごいとしか言い様がない。もしかしたらそれらよりもすごいかもしれない。津島が警戒するのも無理のないことである。

「わかればいい。さ、仕事を始めようか。」

「はい、所長。」

こうして、3人は仕事に取り掛かった。

「今日することは、APTXの廃棄処分についてだったな。」

津島が本山に確認する。

「ええ、そうです。いやあ、しかし本当に回収するのは苦労しましたよ。3ヶ月も掛かってしまいましたから。」

そう言っつて、本山は部屋の隅の机の上に置かれた回収されたAPTXが袋詰されて入っているダンボールを見た。

「仕方ないさ、世界中の支部に配られてしまっていたのだから。」

ま、使用された数が少なかったのがせめてものすくいだよ。」

「全くです。」

そして自分の机に座る本山。

A P T X 4 8 6 9 は結局毒薬としての使用は不安定要素が多すぎると言う事で、全ての廃棄が決定した。最も組織の連中は、証拠を残さず完全犯罪可能というキャッチフレーズのこの毒薬に期待する所大であり、廃棄を渋ったが、「じゃあなにか、これを使用して毒殺に失敗した拳句、組織の事が外部に漏れても良いって言うんだな」と会議の席上で津島に強く言われては、廃棄に同意せざる得なかった。

この日、本山は廃棄してもらった業者を選ぶ予定であった。簡単な様であるが、これは重要な仕事である。いい加減に選んだ拳句、薬を横流しするような悪徳業者に当たるとも限らないのだ。また、口の固い業者であるのかも問題であるから、慎重に決めねばならない。そして業者を決め、依頼の電話をし終えた時には既にお昼近くになっていた。

「所長、業者への発注終わりました。」

「ああ、ご苦労様。今日は私と君は半日だったな？」

「はい、もうすぐ交代の二人が来るでしょう。」

「じゃあ帰ろうか。」

「はい。」

本山は帰り支度をするべく自分の席へ戻っていった。そして津島も同じく帰り支度を始

めた。そこへ兆度交代の伊奈と常滑の二人がやって来た。

「所長、交代です。」

「ああ。それじゃあ後は……」

そこまで言った時、机の上の電話が鳴った。津島は急いで受話器を取った。

電話の相手は組織のお偉いさんで、内容は科学部門の予算の減額に付いてであった。そのため、この電話は長電話となってしまった。



彼としては予算を減らされてはたまらんから粘りに粘った。

その電話の最中に、常滑が何か言ったが、彼は「わかった。」と軽く受け流してしまった。

これがそもその間違いの始まりであつた。

最終的に電話を三十分後に終え、津島は帰宅した。この時2人に声を掛けていればよかったのだが、不愉快な電話の後だったため、彼は黙って帰ってしまったのだつた。

翌日（つまり第一話の日）昼過ぎ

「な、なにiiiiiii!」

出勤してきた津島の声が部屋中に響いた。何事かと、鵜沼と本山が駆け寄つた。

「どうしました所長？」

「本山君。確かA P T Xは袋にまとめて、この机の上に置いたはずだったよな。」

「はい、確か昨日の帰りにそうしておきましたが、それがなにかつて、あれええええ!!」

今度は本山が声を上げた。

机の上には何もなかった。

「なんでないんだ？」

「さあ？」

鵜沼が首を傾げた。

「確か昨日の午後ここにいたのは伊奈と常滑の二人だったよな？」

「はい、確かそうでした。自分は外回りでしたから。」

鵜沼が言った。

ガチャ

扉の開く音がした。3人を見ると、今言った二人が立っていた。

「おはようございます。どうしたんですか、朝から大声上げて？」

伊奈が言った。その彼へ、津島は飛びかかった。

「おい、お前ら昨日ずっとここにいただろう？ここにあったカプセルが入った袋はどうした？」

「ぐ、ぐるじい、やめて下さい所長。」

その言葉に手を離す津島。そして彼の問いに答えたのは、ゴホゴホとむせる伊奈の後ろにいた常滑だった。

「え？あのカプセル剤ですか？あれって、頼んでおいた風邪薬だったんじゃないんですか？」

「何！？」

「ほら昨日、3つの店から補充の依頼が来ているから追加分を出して欲しいって電話中に頼んだでしょう。」

慌てて記憶を探る津島。確かにそんな事を言われたような気がしないでもない。

「じゃあ、まさか。」

「ええ、瓶詰めして出荷しましたよ。高速便で。」

その言葉に、津島、本山、鵜沼の3人の顔が真っ白になった。もし、薬が既に売れてしまっていたら、組織の情報を漏洩させたことになる。そして、すなわちそれは死を意味していた。

「馬鹿者！！あれは回収したAPTXだ。直ぐに出荷先の店に売れてないか確認しろ！！ただし、店の名前や人名を声に出すな。急げ！！」

ようやく事態を理解した二人が電話に飛びついた。

そして、5分後。

「出荷した3店全てで午前中に一個ずつ売れてしまったそうです。残りの薬の販売は差止て貰いましたが……」

常滑のこの言葉に、その場にいた全員の表情が凍りついた。もはや全員粛清されるのが決定したような物だ。

そして、この報告に、津島は腹を決めてこう言い放った。

「全員ここを脱出するぞ！！」

つ  
づ  
く

## 緊急事態発生！（後書き）

というわけで第三話です。ところで前回の短編もそうですが、ご意見・感想ありましたらどうか小説評価お願いします。

## 脱出（前書き）

この第4話からは作者の趣味が丸出しとなっております。コナンだけでなく、他の映画や小説とリンクしている場所があります。

## 脱出

「だ、脱出つて。所長、組織に本気で反抗する気ですか？不可能です。無茶です無謀す。」

本山が啞然となりながら言った。

「そうだ、本山君。これは無謀でしかないのかもしれない。だが、我々は組織の情報を外部に漏らした。これは充分粛清の対象に値する。おそらくすでに上には盗聴器でこの事は知られているだろう。ということは、一時間もしない内にジンカベルモット辺りが我々の処分にやってくるのは目に見えている。つまりここに留まっていなくても我々には死しかない。だったら、どうせ死ぬなら最後の最後までとことんあがいてやろうじゃないか。」

津島は笑いながらそう言った。

「所長。」

「それにだ、薬がどうなったのかも調べなければならぬ。無関係の人を巻き込んだ罪滅ぼしはせにやあかん。そして……」

津島が言葉を切る。

「そして？」

本山が聞いた。

「宮野研究員に出来た事が我々に出来ない事はないだろう。ま、無理に付いてこいとは言わんが。皆はどうだ？」

津島の言葉に、四人はしばし沈黙した。

1分程して。

「自分は所長についていきます。」

沈黙を破って。本山が言った。そして、他の四人も意を決した。

「――自分達も行きます」――

5人の意志が一つになった。

「ありがとう皆。よし、それでは今後の行動を決めよう。5人まとまって行動すれば、ばれる可能性が高い。よって私と本山、そして常滑、伊奈、鵜沼の二班に別れて行動しよう。それと、おい常滑、出荷した店のリストを見せてくれ。」

津島に言われ、常滑が直ぐにリストを差し出した。

「これです。この赤い丸が打つてある店です。」

津島は渡されたリストに素早く目を通した。

「うん。なるほど。よし、じゃあ常滑達はこっちの店へ行け。俺達はこっちの二店へく。」

「判りました。」

その後、細かい打ち合わせをした。

「よし、それじゃあ全員準備に掛かれ。慌てず急げよ。」

津島の言葉と共に5人は脱出する準備に入った。

白衣を脱いで背広に着替え、眼鏡や付け髭で簡単な変装をする。

そんな中で、津島は組織のノートパソコンと、薬や実験のデータが入ったROMを鞆に入れていた。さらに本山と協力して一部の書類をシュレッダーにかけ、パソコンのデータを破壊する。これは組織が後でデータを流用できないようにするために行う。いわば嫌がらせである。

それを終えると、二人は部屋の奥にある金庫を開けた。中には非常に用意された拳銃と弾倉が収められていた。それらを素早く出して装填し、いつでも撃てるようにしておく。

「拳銃は2丁しかありません。しかも弾は一回分ずつです。」

本山が言う。

「ああ、こっちとむこうで一丁ずつ持っていくしかないな。」

保管されていたのはたった二丁。一人に一丁もない。しかも弾も

わずかしかなかった。そこで津島は他にも武器になりそうな物を持つていくことにした。硫酸に塩酸のビン。それにあるだけの刃物類を持ち出す。

二人がそれらの準備を終え、下の駐車場に降りると、先に準備を終えた三人が待っていた。

津島は彼らの分の武器を渡した。

「それでは所長。ここでお別れです。」

常滑が言った。

「ああ、また会えることを祈るよ。」

「はい、お世話になりました。本山さんもまた会いましょう。」

「ああ。」

「それではまた会えることを。」

「お元気で。」

「行ってきます。」

そう言つて、三人は車に乗り込み行つてしまった。そして、本山にとってこれが彼らと

の今生の別れとなつてしまうことになる。

「それじゃあ、我々も行きますか。」

「そうだな。」

津島と本山も車に乗り込み、そして出発した。

「こつちが行くのは都内でしたね？」

本山が津島に確認する。

「ああ、常滑達は大阪の寝屋川に、我々は江古田町と米花町だ。ここからなら40分ぐらいだな。」

ここで初めて津島が具体的な場所を口にした。ちなみにここまで言わなかったのは、組織に行き先を盗聴され、そこから追跡されるのを恐れての事だ。

運転するのは津島で、後席には本山が乗る。ちなみに、この車に盗聴器が仕掛けられていないかは既に確認済みである。

二人はとにかく周りの車に気を配る。いっどこから組織の連中が



襲ってくるか判らない。会話もせず、とにかく全神経を外に集中する。

車は何事もなく進む。時間は3時を回ったくらいなので、道はそんなに混んではない。

しだいに二人の緊張感は溶けていった。

しかし二十分後、二人にとって最悪の連絡が本山の携帯に入った。「メールです。常滑からだ。」

直ぐにメールを開け中身を確認する。

メールを読んでいくに従い、本山の顔が暗くなって行った。

「どうした。常滑はなんて言ってきたんだ？」

前席の津島が本山の異変を見て言った。

「……。」

本山は何も言わない。信号が赤になって止まったところで、津島は本山から携帯をひったくった。

メールを見て津島も絶句した。

（見つかった。囲まれた。逃げられない。ごきげんようさようなら。）

常滑達は組織に見つかってしまったようだ。

「こんな、・こんなことってありかよ。」

本山が悔しさからそう言った時であった。突然停車していた車が急発進しさらに180度回頭し、本山はシートに叩きつけられた。

「どうしたんですか？所長。」

「追っ手だ！」

「え！！！」

本山が後ろを振り返ったが、特に怪しい車は見当たらない。

「大丈夫だ。今一端撒いた。もっともやつらのことだ、直に追いついてくるに決まっている。」

「どうするんです？」

「どうするもこうするもない。このまま一緒にいれば、万が一捕まった時には全滅だ。だから二手に分かれよう。お前は列車を使っ

て米花町に迎え、ここならTTRの東陽町の駅が近い。」

津島はもし捕まった場合に備え、全滅を避ける方法を選んだ。そして、本山にも異議はなかった。

「わかりました。」

「よし、じゃあこれを持っていけ。」

そう言つて、津島は懷から拳銃を出した。

「え！所長。それでは所長の武器がなくなつてしまいますよ。」

「いいんだよ。こんな老いばれより、君みたいな若いもんが身を守らんでどうする。それに俺のような人間の首の一つや二つ、いくらでも奴らにくれてやるわ。」

笑いながら津島が言う。

「所長。」

「さ、着いたぞ。ついだ、その組織のパソコンも持っていけ。何かのきつと役に立つはずだ。さあ、行け！行って常滑達の仇を取れ！」

「……はい。行きます！」

拳銃を受け取り、パソコンが入ったケースを持つと、彼は車から降りて地下鉄の入り口

へ向かった。振り返る事もなく。

## 接触

米花町毛利探偵事務所

「やっと着いた。」

本山はようやく、窓に白い文字で毛利探偵事務所と書かれている建物を見つけた。

津島と分かれ、TTR東陽線に乗り、その後数回の乗換えを経て最終的に第三セクターのTR東都環状線米花駅に降り立ったころには、既に四時を回っていた。その後、問題の駅前のドラッグに行き、取り敢えず薬の処分と、自分が来た事は他言無用と言い渡し、そして最も重要な用件、薬を買った人物に付いて聞いてきた。

「まさか探偵の娘さんとはなあ。」

彼自身、買った人物がかの有名な名探偵、毛利小五郎の娘である毛利蘭であると聞いた時、正直耳を疑った。

「ま、そういう有名な人物だから店員さんも覚えていたんだろうけど。」

自分の相手をした眼鏡を掛けた若い女性店員は、笑いながら「彼女は空手の都大会の優勝者で、新聞に顔が載ったぐらい有名ですよ。」と言った時の光景が未だに目に浮かぶ。

「都大会の優勝者で探偵の娘か。……一体どうなるやら、とにかく会わなきゃな。」

彼は追っ手がいないか周囲を確認しながら、事務所への階段を上り始めた。

「さあ、鬼が出るか蛇が出るか……。」

そんなことを呟きつつ、事務所に着いた。そして、呼び鈴を押す。

しかし、反応がない。2回3回と繰り返すが、それでも反応はない。  
「留守かな？」

彼があきらめかけた時。

「はあい。」

子供の声が上がらした。彼が首を曲げると、上の階のおどり場に、7、8歳ぐらいの少年と少女が立っていた。（コナンと幼児化した蘭です。）

「小五郎おじさんに依頼ですか？」

コナンが階段を下りながら言った。

「いや、そういうわけじゃないよボウヤ。用があるのはその娘さんの蘭さんという人だよ。」

蘭と言った時、コナンの目に警戒の色が現れたのを、本山は見逃さなかった。

「へえ、蘭姉ちゃんに。一体何の用があるの？」

「いやね、そのなんと言うか、あ紹介が遅れたね。私はヤタガラス製薬主任の本山と言う者だ。」

そう彼が言った途端、コナンの表情はさらに険しくなり、加えて後にいる蘭も驚いている。

「ふうん。そうなんだ。ヤタガラス製薬の人か。けどおじさん、何か他に隠してない？」

低い声でそういいながら、コナンは時計型麻醉銃の照準器を開き、狙いを本山に付ける。

一方の本山は、そのコナンの動きに冷静に対応しつつ、心の中でこう思っていた。

（こいつ。ただの小学生じゃないな。）

「ほう、おもしろい物を持っているじゃないか、しかしそういう君こそ、何か隠してないかね？」

本山がそう返すと、コナンの眉が少し動いた。しかし、彼も努めて冷静さを保っていた。しばらく、二人のにらみ合いが続いた。

「安心しろ、私は毛利探偵や蘭さんを傷つけ様なんて思っちゃい

ないし、それどころか助けを求めたいところだよ。」

沈黙を破って本山がまずそう言った。

「え！？」

蘭とコナンが同時に驚いた。しかし、コナンは直ぐに先程の表情に戻る。

「そんなこと、簡単に信じねえな。」

「そうかわかった。そこまで言うならこれは君が預かっておくといい。」

そう言つて、本山は懐の拳銃をコナンに差し出した。

「本物だ。」

コナンが受けとつて呟いた。

「これでも駄目かな？」

本山が笑いながら言つと、さすがにコナンは警戒を緩めた。表情と喋り方から、彼の言つた事を信じる気になったようだ。

「分かった。とりあえずあんたを信じよう。」

「ありがとう。さあ、とにかく毛利探偵と蘭さんに会わせてくれ。」

「おっちゃんは今気絶していて無理だよ。そして、蘭ならあんたの目の前にいるよ。」

本山はコナンの言葉にギョツとした。コナン以外で目の前にいるのは、どうみても小学校低学年の少女だけである。

「え、ま、まさか君が毛利蘭さん？」

幼児化した蘭を指差しながら本山は言った。蘭はそれに対し、こくつと頷いた。

「なんてこつたい、まさかA P T Xの幼児化の効能は事実だったのか？」

A P T Xという単語に、コナンは強く反応した。

「なに、じゃああんたはやっぱり黒の組織の？」

「何だつて！！何故そのことを……」

本山がそこまで言った時、蘭が会話に入りこんだ。

「あのう、二人とも。」

「「えー！」」

「取り敢えず、上に上がって、ゆっくり話しませんか？」

二人はその言葉で、ようやくここが階段の踊り場であったの思  
い出した。

「なるほどね、工藤君はジン達に飲まされて、そして蘭さんはや  
はりあの風邪薬と間違えてA P T Xを飲んでしまったのか。いや申  
し訳ないことをした。しかし、まさか大阪の方の被害者は君達の友  
人とは、世間は意外と狭いね。」

本山が苦笑いしながら言った。

「そしてあんたはその失敗で組織に殺されるのを恐れて脱走した  
というわけか。」

コナン、いや新一が言った。

ここは毛利探偵事務所の上にある毛利家。その居間で3人は話  
しをしていた。ちなみに、なぜ事務所ではないのかというと、実を  
言うと小五郎は蘭が幼児化して失神したさい、同時に頭を強か打っ  
てしまって今だに起きない。新一は彼を事務所のソファーになんと  
か寝かせた。そしてソファーは今だ小五郎が占拠して使えないので

ここで話しているのだ。

「まあそう言う事だ。しかし、今の所4人とも幼児化したものの死ななくてほつとしているよ。あの薬の被害者は多いからね。」

「けど死ぬ程苦しかったです。」

新一と蘭がそろって精一杯の皮肉を込めて言った。

「ごめん。」

「あ、そんな気にしないで下さい。一応死ななかったわけですし、それよりも本山さんはこれからどうするんですか？」

蘭が言い、それに対し本山が渋い表情をする。

「それなんだよ蘭さん。私としては一刻も早く君達に解毒剤を作りたいのだからね。」

その言葉に、新一と蘭は不安そうにする。

「だめなんですか？」

蘭が聞いた。

「いやそう言うわけじゃないんだ。解毒剤自体の作り方は判るんだ。ただ成分の分析と材料の調達が必要で……」

本山がそこまで言った時、新一が言った。

「え！！解毒剤の成分がわかるんですか？」

「ああ、薬のデータとそれを見るのに必要なパソコンは会社（組織）から持ち出してきたから。」

そう言って、パソコンが入ったケースを見せる。

「やったああ！！」

新一が叫んだ。

「？」

「？」

その姿を怪訝な表情で見る本山と蘭。

「新一、なんでそんなに喜ぶのよ？」

「これが喜ばずにいられるかって。蘭、俺達は直ぐ戻れるぜ。そのデータを灰原に見せれば直ぐに解毒剤を作ってくれるぜ！」

新一の灰原という言葉に、本山は気になった。

「その灰原って言うのは誰だい？」

「あんたと同じで組織から逃げてきた女だよ。コードネームはシエリー。」

新一の言葉に、今度は本山が叫んだ。

「何と！宮野君は生きていたのか。そりゃあ良かった。彼女も両親やお姉さんと同じ様に殺されたんじゃないかと研究所の全員が気にしていたが。」

「え！？哀ちゃんのご両親って殺されたの？」

蘭が新一に聞いた。（この時点で蘭は新一からひととおり事情を聞いています。）

「いや、俺もあいつからは事故としか。」

新一も初耳であった。

「まあその話しはまた後で改めて言うよ。けど解毒剤は良いとしても、まだ問題はあるよ。私は追われていること、そして江古田で売れたもう一つの薬…」

本山がそこまで言った時、下の階から呼び鈴の音と、子供声が聞こえた。

「おい、工藤、来たで。それとお客はん連れて来たで。」

平次の声だ。

「あ、平次君達着いたみたいだね、新一。」

「ああ、けどお客さんって何だ？」

二人は直ぐに下の階に下りる。本山も二人に着いていった。

3人が下まで行くと、そこには幼児化した平次と和葉、そしてもう一組の少年と少女がいた。しかも、新一と蘭そっくりの。

「新一が二人！！」

「快斗が二人！！」

蘭と青子が同時に叫んだ。

一方、この光景を見て、本山はこう呟いた。

「こりゃあまたややこしくなりそうだな。」

こうして役者は揃った。



## おまけの用語解説

T T R 踊る大捜査線のスピンオフ作品、交渉人真下正義に登場する地下鉄会社。正式名は東京トランスポート・エーション・レールウェイ。実在する東京メトロと同じく、公団から民営化されたとされている。ちなみにT Rはコナンに登場する鉄道会社東都環状線などを運行してる。この作中の同社が第三セクターというのは独自の設定です。

駅前のドラッグ コナンアニメオリジナルの危険なレシピに登場した店の事。眼鏡を掛けた女性店員も同作で探偵団の聞き込みを受けたキャラである。

## 決戦への序曲高まる

### 新たな登場人物

ジン 黒の組織の実行部隊のリーダー格の男。新一をコナンにした張本人。

ウオツカ ジンの部下。優秀とは言い難いがジンへの忠誠心は厚い。

ベルモット 新一と志保の正体を知る組織の女。あのお方のお気に入り的人物とされている。

「と言う訳さ、小さな探偵君」

「ハハハ、おめえだって今は小さいじゃないか。」

快斗の言葉に、新一は苦笑いする。ここは毛利家のコナン（新一）の部屋。座って話し合っているのは新一と快斗の二人だけだ。快斗は青子と一緒に毛利探偵事務所に着いた後、自分達も被害者であり、同じ状態にある新一に助けを求めるために来た事を告げ、そして快斗は新一に二人だけで話したい事が有ると言い、今こうしているわけである。

快斗が新一に最初に言ったことは自分のもう一つの姿、怪盗キッ

ドである事だった。しかし、新一はそれに対しただ一言、「やつぱりな。」と言っただけであった。これには大いにガクツと来た快斗であった。しかし新一にしてみれば、最初に会ったときに感じた快斗の視線と雰囲気で、彼がキッドという予感がしていた。だからさっきのリアクションとなったのである。そして自分がなぜキッドになったかや、自分が追っている組織が黒の組織らしいことも。

「なるほど。それで最近、お前はビッグジュエルばかりを。」

「そういうこと。ところでさ、さっきいっしょにいた男誰だよ？」

快斗が本山について聞いた。

「ああ、あの人は……」

新一は彼について説明した。

「え！ーじゃああの本山とかいう男が持っている薬のデータを、阿笠博士（ちなみに快斗は彼を知っています）の所にいる娘に渡せば、解毒剤を作ってもらえるのか？」

「ああ、多分な。」

「よっしゃー！ー！これでお前のように小学校に行かずに済むぜ。」

「ハハハ……」

快斗の喜びにひたすら苦笑いするしかない新一であった。もっとも、この後決して快斗の思ったとおりに事は運ばない事になるのだが。

と、そこでいきなり真剣な表情になる新一。それを怪訝な表情で見る快斗。

「どうしたんだよ？つて、あ！」

快斗も気付いた様だ。二人はゆっくりとドアに近づき、そして勢い良く開けた。その途端、蘭、青子、平次、和葉の四人が部屋の中に倒れ込んだ。どうやらドアにくっついて聞き耳を立てていたらしい。

「「おめえら何やってるんだ？」」

二人の言葉がはもる。

「堪忍や工藤。やっぱ人間ちゅーのは秘密つてもんに弱いもんで。」

「平次が謝るが、明らかに上辺だけだ。」

「盗み聞きとは、探偵としてのモラルに反するのでは？西の名探偵さん。」

快斗が得意のポーカーフェイスで言った。

「うつさい、キッドに言われとうないわ。」

「あつ、やっぱり俺の正体について聞いていたんだ。」

「ああ。」

「つてことは青子も。」

快斗が青子の方を見ると、うつむいていて表情はわからない。

「ごめん。青子。俺……」

快斗がそこまで言った時、青子の口が開いた。

「知ってたよ。」

「え！？」

「青子ね、快斗がキッドってこと判ってたよ。だって、青子は快斗の幼馴染だもん。どんなに隠したってわかつちゃうよ。けどね、快斗だってただ好きでこんな事しているわけじゃないって思ったから、だから快斗が言ってくれるまで知らないふりしようと思っていたの。」

「青子。」

そして黙り込む二人。

「なんや、黒羽と工藤は似た者どうしなんやな。」

平次が言った。

「え！！」

平次の言葉に驚く二人。

「だってそうやろ、おたがいとんでもない運命しよって、愛する幼馴染の女を守ろうと待たせていたうちゅことやろ。ついでに容姿もやろ。」

確かに言われてみればそんな気もしない事はない。しかし、それを平次はにやにやかからかいながら言ったから、二人としては良い気

分ではない。しかも、愛すると付けたせいであろう案の定二人の幼馴染は顔を真っ赤にしている。そこで、新一が反撃に転じた。

「幼馴染を待たせているのならおめえもたる服部。」

「えー!!」

途端に平次と和葉が同時に真っ赤になる。

「へえ、西の探偵も中々隅に置けませんな。」

快斗も茶化す。それによつてますます赤くなる二人。いきなりで混乱しているのか反論さえ出来ない。

そんな二人に救いの手を差し伸べる人物が現れる。

「あのう。」

一人蚊帳の外状態だった本山だ。

「あ、どうしました。」

「ラブコメを進展させるのは構わないが、早く宮野君の所に連れてつて欲しいんだけど。」

六人はやつとその事を思い出した。（ちなみに、青子と和葉も既に彼女について説明を受けている。）

「そうだった。忘れていたぜ。じゃあ新一、案内してくれよ。」

「ああ。」

「ちよつと新一、お父さんはどうするのよ。」

直ぐに出る気満々だった新一に蘭が言う。

「ああ、そうだった。取り敢えず書置きしておこうぜ。そうすればおっちゃんも後でくるさ。」

「ええ、そうね。」

蘭は書置きを家の方に残した。そして六人は阿笠邸目指して出発した。

こうして物語は大きく動き始めた。

一方、そのころ黒の組織日本支部の一室では、一悶着起きていた。  
「ジン、一体これはどういうことかな？」

「……」

椅子に座った和服姿の老人が、黒の組織では知らぬ者はいないという切れ者、ジンに向かって言った。一方のジンは何も言わず、沈黙している。

「科学部門の連中の失態と脱走を許した挙句、一人の逃走を許すとは、前代未聞だぞ。」

どうやらジンは、本山達の脱走を許した事を叱責されている様だ。ちなみに彼の隣には相棒のウオツカと、ここの所良く行動を共にする事が多い、ベルモットの二人がいた。

「貴様らは最近弛んでいるのではないか？ シエリーの脱走、暗殺の失敗。キルシュの行方不明。さらにFBIの追跡を受けているそうじゃないか。そして今回の失態だ。」

「しかしボス。まだ組織の情報が外に漏れたとは限りませんし。」  
ウオツカが言った。

「ばれてからでは遅いんだ！ あの方も大変ご立腹であるんだぞ。先程、増援の為にロシア極東支部から4人回すと言ってきた。これが意味する事はわかるな、下手すると来週には日本支部の幹部の首が全員すげ変わっているかもしれんぞ！」

「……」

「それにベルモット。お前がいくらあの方のお気に入りでも、今回はどうなるかわからず。とにかくだ。貴様らには人員と装備の使用自由を認める。何としても、裏切り者の本山を発見し、組織の情報漏洩を防げ、いいな。」

そして3人はその部屋から出た。

「まずいことになりましたね兄貴。」

「なに、こうなったらとことんやるだけだ。」

ジンがいつもの冷笑を浮かべながら言う。

「けどどうするのよ、探すあてはあるの？」

ベルモットが言う。

「とにかく、今は人手と武器を集める。さっきのように苦労するとまずいからな。」

ジンが言うのは、先程追い詰めた常滑達の事だ。彼らは組織に取り囲まれた後も、持っていた拳銃や薬品の瓶で激しく応戦し、結局ジンたちは、拳銃の集中射撃でこれを押さえこんだのであった。

ジンはまず、手の空いている者を全員自分の指揮下に置いた。その中には、宝石強盗を繰り返し、パンドラを探すスネイクらの姿もあった。

人数が集まると、ジンは持ち出せるだけの武器を持ち出すことにした。組織の武器庫には、それこそ選り取りみどりの武器があった。拳銃、小銃、機関銃、手榴弾、果てはバズーカ（対戦車ミサイル）まで持ち出した。

「ちょ、ちよつと兄貴、いくらなんでもやりすぎじゃ。」

「そうよ、ジン。」

怪訝な表情で言う二人に、ジンはこう言った。

「もし組織が敵になったらこれでも足りねえぞ。」

なんとジンは組織が自分達を裏切る事も計算にいれているらしい。こうして武器と人は揃った。

「あとは、どこを探すかだ。」

そこへ、下っ端の一人がやって来て言った。

「あのお、毛利探偵事務所に仕掛けた盗聴器に本山の声が入っていましたか。」

「何？本当か。」

「はい、スパコンで声紋検査をしましたか、一致しました。」

ジンはそれを聞いてにやりとする。実はジン、先日のキルシュが

行方不明になった後、密かに毛利探偵事務所に盗聴器を仕掛けていたらしい。それが入り口の外で喋る本山の声を拾ったらしい。

「よし、行き先は決まった。米花町の毛利探偵事務所だ。ふふふ、待ってる本山、あの探偵と一緒に灰にしてやる。」

ジンがいつにも増して恐ろしい悪魔の笑みを浮かべ言った。それを見たその場の全員が思った。（俺達、この人と行動を共にして良いんだろうか？）

## おまけの用語辞典

和服姿の老人 まじつく快斗でスネイクらに指示を出していた人物です。



## 決戦への序曲高まる（後書き）

感想お待ちしています。



## 共同戦線構築

阿笠邸

七人は、阿笠邸にやって来ていた。新一が前もって電話で連絡してあったので、阿笠博士と灰原哀こと宮野志保は既にリビングで待っていた。

「博士、それに灰原世話になるぜ。」

「おお、新一に皆。待つとたぞ。」

「全く、今回はまたいつにもまして厄介な事を呼び寄せてくれたわね。ま、いいけど。」

哀、いや志保がいつもの様に言う。

「うるせえ。それよりも、本山さん。あいつが宮野志保です。あ

あ、もう変装は解いて良いですよ。」

新一に言われ、本山は変装を解いた。

「始めまして宮野君。本山幸平と言います。」

本山が志保に自己紹介する。

「わるいけど、私あなたの事は知らないわ。」

「ははは、まあそうだろうね。私は君が生まれて直ぐの頃にイギリスの支部へ行ったから。けど、君とお姉さんのことは宮野さんから聞いていた。あの人、随分親バカで、君達の事を自慢していたかな。」

「え？」

意外な事実に驚く志保。

「ああ、これがその時の写真だよ。」

志保が写真を見ると、五、六人の男が写っていた。

「ああ、この人が宮野博士ですな。」

いつのまにか覗き込んで来た阿笠博士が一人の男を指差す。そこに写っていたのは、温厚そうな四十代前半の男性であった。

「この人が、お父さん。」

志保が呟いた。

「おお、あなたが阿笠博士ですな。」

覗き込んで来た博士に向かって、本山が声を上げる。

「え、そうですが。はて、あなたと面識はないはずですが。」

「いや、宮野博士からお話をお聞きしておりました。中々ユニークな発明をする。」

「そうですか、宮野博士が。いやあ、光栄です。」

喜ぶ博士、しかしそれを新一と志保はジト目で見ていた。「宮野博士は決して誉めていたとは限らないぞ。」と言いたげだ。

「ま、挨拶はここまでにして、それでは、本題に入りましょう。」

本山のその言葉に、新一達は真剣な表情になる。

「しかし、その前に。あの子達を何とかしませんと。」

本山の言うあの子達とは、蘭、和葉、青子の三人の事であった。

#### 1時間後 阿笠邸地下室

取り敢えず、蘭達に夕食の準備をするよう言い、他の六人（新一、博士、志保、平次、快斗、本山）は地下室で話し合っていた。

「じゃあ、組織はあなたを探して動いているのね。」

本山から話を聞いた志保が言った。

「けど、あんたの持っているパソコンを使って解毒剤を完成させて、そしてとつとと警察に言っちまえば良いんじゃないのか？」

快斗が言った。

「いや、事は簡単に行かんのだよ快斗君。確かに、解毒剤は作れるよ。しかし、人数は七人。しかも、解毒剤の成分を解読し、さら

に原料の調達だって必要だ。それを考えれば、どんなに軽く見積もっても一週間は掛かる。君達が解毒剤を使って元に戻るところを証明できれば警察は動くだろう。しかし、現在組織の犯罪を証明するのは物は何もない。」

「つまり、やつらを直接捕まえなあかんっちゅうことやな。」

平次が本山に続いて言う。

「そう、そこが問題なんだよ。」

「いや、そうでもないぜ。」

新一が不適な笑顔を浮かべながら言った。

「そうでもないってどう言う意味よ、工藤君。」

志保が怪訝な表情をして言った。

「実は、蘭が小さくなる所をおっちゃんに見られちゃったんだ。」

「「「え!!」「」」」

「それじゃあ。」

「そう、博士の思っているとおりだ。俺達が言っても警察は信用しないだろうが、眠りの小五郎といわれるおっちゃんが言えば、少なくとも目暮警部や高木刑事達は動いてくれるはずだ。」

新一の言葉に、その場の全員の顔が明るくなる。

「よっしゃ、あのおっさんもたまには良いことしてくれはるな。」

その平次の言葉に、今度は全員苦笑い。ここにいる全員眠りの小五郎の正体を知らされていたからだ。

「ところで、新一。お前はどのような気なんだ。警察に全部任せて大人しく解毒剤の完成を待っているのか？」

快斗が新一に向かって言う。それに対し、新一はいつもの事件に挑む顔になって言い返した。

「バー口。そんな悠著なこととしてられっか。一刻も早く組織をぶっ潰さねえと灰原を含めて俺達全員枕を高くして眠れねえからな、捜査に協力するに決まってるんだ。そういうお前そ、親父さんの仇を取るんだろ。わかってるぜ、お前がそういうやつってことはな。」

「さすがは名探偵。良くお分かりで。」

快斗が得意のポーカーフフェイスで言い返す。

「おいおい、俺もいること忘れんといてや。」

一人蚊帳の外状態になりかけていた平次が会話に割り込む。

「わかつてるぜ服部。」

こうして、三人の意見は一致し、恐らく世界最強の三人組が結成された。しかし、志保がそこへ水を差す。

「けど、工藤君や服部君はともかく、黒羽君は捜査の輪に入れてもらえるかしら？」

「何！？」

「だってあなたはキッドである以外はただの高校生でしょ、そんな人物が捜査の輪に入れてもらえるとは思えないけど。」

「あ！」

その場にいた全員がハツとする。一人を除いて。それは本山だった。

「それは大丈夫だと思うよ。」

「え！？」

「だってもし黒羽君がキッドと言っても、警察はそれで捕まえることは出来ないよ。だってキッドは確か今まで証拠を残していないんだろ。自分だけじゃ立件できないよ。だから堂々とキッドであり、事情を言えば良いんじゃないかな。もしかしたら司法取引もできるかもしれないし。」

確かに一理ある考えであった。

「ま、確かに目暮警部達なら説明すればお前を直ぐに捕まえないだろうな。」

新一もうなずく。

「よっしゃ、そうと決まったら毛利のおっさんが来たら直ぐに警部に連絡やな。」

「「おう！！」」

平次の言葉に合わせ、うなずく新一と快斗。

「けどその前に。」

灰原が言う。

「……？」

「彼女達の夕食を食べて上げなくちゃね。」

「……え！？」

三人が部屋の入り口を見ると、蘭達が笑顔で立っていた。そう、恐怖の笑顔で。

「新一、まさか私のこと忘れていたんじゃないわよね。」

恐怖の笑みを浮かべつつ新一に迫る蘭。

「ば、バー口オ。俺は小さくなってからもお前のことを忘れた事なんかないぜ、ってアツ！！」

「え、あ、あのそれってつまり。」

二人とも真っ赤になって黙ってしまった。間接的にはあるが、これでは蘭に好きと言っているも同然だ。しかも、真剣な表情で言ったから、さすがの蘭でもわかった。

「よかったやん蘭ちゃん。で、平次はどうなん。」

平次に迫る和葉。

「あ、アホ。俺も工藤と同じに決まってるやろ。俺はお前が好きなんやからな。」

「え！？」

この二人も真っ赤になって黙ってしまった。

「おい、おい。直球かよ。」

「良かったね和葉ちゃん。で、快斗は。」

快斗に迫る青子。（何かパターンが似てるね。）

「え、俺は、その。」

返答に詰まる快斗。

「どうなの？」

「俺は……青く光り輝く宝石を、自分の物にしたいといつも思っていますよ。」

キッドの口調になり、そしてマジックで花を出し、青子に差し出す快斗。

「え、え!!」

突然、キッドモードになった快斗に狼狽する青子。ま、一応青い宝石が自分のことであることはわかったらしい。そして、この二人も真っ赤になって黙り込んでしまった。

奇妙な沈黙が部屋を支配した。それを破ったのは本山だった。

「いやあ、若いつて言うのはいいもんですな、阿笠さん。」

「そうだなあ、ははは…」

そんな二人につられるように、志保もクスクスと笑っていた。さらに顔を真っ赤にする六人。

「はははは、いやこれ以上いじめちゃ可哀想だ。それじゃあ、とにかくメシにしましょうや皆さん。」

「そうじゃな、さあ、みんな行くぞ。」

こうして、その場にいた全員は地下室から出た。そしてこの直後、小五郎が合流した。新一達は食事を終わらせると、三度自分達や本山、そして組織の事を説明した。そして、事情を理解した小五郎の連絡を受け、目暮警部に佐藤、高木両刑事が到着した時には、既に午前零時を回っていた。夜遅くに三人は突然呼び出しを受けたので、すぐ不機嫌そうにしてやって来たが、新一達の話しを聞き終えた時にはいつものバリバリの刑事モードになっていた。

「なんと、コナン君が工藤君だったとは。」

目暮警部が驚きの声を上げる。ま、普通に考えれば目の前の小学生にしか見えない少年が、あの高校生探偵とは信じれるはずがない。それにくらべ、佐藤刑事達は以外と冷静だった。

「ま、なんとなくそんな予感があったんだけどね。」

「ええ、いつも思っていたんですよ。ただの小学生じゃないって。」

「やはりこの二人感が鋭い。」

「けど、西の名探偵や怪盗キッドも同時に小さくなっちゃうなんて、世の中広いようで狭いわね。」

「「「はははは…」「」「」」



佐藤刑事の言葉に苦笑いする新一、快斗、平次の三人。ちなみに、今この場にいるのは、小五郎、志保、阿笠博士、本山、警視庁の三人、そして新一達の計十人。蘭達三人も当事者として参加を申し出たが、もう遅いからと新一達が寝室に追いやってしまった。もつともこれはこれ以上彼女らを事件に深入りさせたくないという強い思いがあつたからだ。

「それより警部殿。問題は、」

「わかつてるよ毛利君。」

そして目暮は体を本山のほうに向けた。

「本山さん。工藤君たちを元に戻すには一体どれくらいの時間が掛かりますか？」

「先程も言いましたが、数日で作ると言つのは無理です。通常薬というものは何年も掛けて作る物です。一応今回はパソコンのデータがあるので、解毒剤の成分は一週間かそこらで出きるでしょう。しかし、そこから先、薬を作るのは別問題です。材料を入手し、調合してさらにマウスを使った実験も必要でしょう。どんなに軽く見積もっても、1ヶ月は掛かります。もつとも、もし薬自体をばらして作っていたら、さらに一、二週間は上積みせねばならなかったでしょうが。」

「私も同意見。」

本山の意見に同調する志保。

「それよりも問題は、宮野や本山さんを追っている組織の方だ。」  
快斗が言った。

「それなんだが黒羽君。警視庁はその組織について全く知らなかった。つまり、彼らが一体どんな組織で、どんな犯罪を行ってきたのか全くわからない。そのシッポさえ掴んでおらん。それに、その薬を証拠にしようにも、毒は検出されない薬ではな。」

「つまり、現状では捜査不可能と。」

小五郎が口を開く。

「そうなるな。」

その言葉に全員から溜め息が出る。

「では、取り敢えず私を逮捕して下さい。」

本山の言葉に、全員今度は驚いた表情になる。

「私は彼らからマークされています。その私が警察に捕まれば、彼らも何らかの行動を起こすでしょう。そこを狙うんです。」

「しかし、なんの罪で逮捕しろと？」

「工藤君、さつき君に預けた物を。」

新一はそう言われると、預かっていた拳銃を出した。

「これは組織から持ち出した物です。今は工藤君に預けていましたが、一応私の持物です。これなら銃刀法違反でしょ。」

「しかし、危険では？」

「ですが……」

この後、その場の全員での議論は続き、気付いた時には二時を回っていた。最終的に、それぞれが以下の様に行動することで固まった。

新一 阿笠邸にて待機。臨機応変に行動。

平次 上に同じ。

快斗 機械が扱えるので阿笠博士のサポート。

志保 阿笠邸にて解毒剤作り。

小五郎 警視庁で捜査協力。

阿笠博士 予備の物も総動員して、探偵用アイテムを揃える。（平次や快斗用。）

警視庁の三人 一課に戻って捜査。

本山 警視庁に行き捜査協力、ならびに組織を釣り出すための囷役。

それが決まった時、目暮警部の携帯に信じられない連絡が入った。

「毛利君。君の事務所が爆破された。」

目暮は電話を切るとそう言った。そしてその場にいた全員の表情が凍りついた。



## 共同戦線構築（後書き）

毛利家爆破！！一体何が始まったのか！？

その時歴史は動いた（前書き）

毛利探偵事務所爆破！！その真実とは！！

## その時歴史は動いた

### 新たな登場人物

ラオチュウ（老酒）：黒の組織の爆破担当部隊のリーダー。西多摩市のツインタワービル爆破等を行ったベテラン。

可児警部：米花署の警部。

午前二時 毛利探偵事務所向かい側ビル屋上

「兄貴、どうやら本当に誰もいないみたいですね。」

ウオツカが真つ暗な事務所を見ながら言った。

「どうします？ 本山とあの探偵はどっか逃げちまったようですよ。」

「  
ジンは煙草をふかしながらその言葉を聞いていた。ちなみにここにいるのはジン、ウオツカ、ベルモット、そして爆破専門の三名の構成員だ。スネイクラ他のメンバーは事務所を囲む様に散らばっていた。」

「ジン、彼らがいらないんじゃないかたがたいわ、行き

ましょう。」

ベルモットは何故か微笑みながら言った。そして彼女が屋上の入り口に向かって歩き出した時。

「待て!!」

歩いて行こうとしたベルモットをジンが止める。

「やつらがいないにしても警告を与える意味はある。おい!!おまえら。」

ジンが大きなあくびをかましていた爆破係の三名を呼ぶ。

「何ですか?」

「あの事務所をビルごと吹き飛ばしてこい。さすがにそうすればやつらも姿を見せるだろう。」

彼の頭には既に燃える事務所が見えていた。しかし爆破係のリーダーであるラオチュウから帰って来たのは意外な返事であった。

「出来ません。」

素っ気無い一言。

「何だと!!」

「どういうことだ!!」

ジンとウオツカが彼に問う。

「だって出きるわけないでしょ。爆薬は先日の西多摩市のツインタワービルでの工作で殆ど使い切ったんですから。」

確かに、あの時盛大に爆薬を使った。

「けど、普通直ぐに仕入れるでしょうが?」

ベルモットが当然と思える質問をするが、それにもラオチュウは首を横に振る。

「出来なかったんですよ。ここ最近需要があるようで、中々手に入れんのです。」

言われてみれば、今年は爆弾テロが多かった。五月の米花シティービル爆破、夏の豪華客船撃沈事件、東都タワーの爆破未遂。それこそ枚挙にいとまがない。

「仕方ないわ、爆薬がないんじゃない。」

「そうですね。」

ウオツカとベルモットがあきらめかけるが。

「いや、まだ方法はある。」

「「？」」

「お前ら、対戦車ミサイルを二基持つて来い。」

「「えー！」」

「わかりました。おい！お前ら。」

ジンの言葉に驚く二人を尻目に、ラオチュウは部下に指示を出す。

「「ちょ、ちょっとジン（兄貴）、なにもそこまでして。」」

「うるさい。」

二人に拳銃を向けるジン。

「このまま引き下がっちゃ俺の腹の虫がおさまらん。」

（（あんたの腹の虫をおさえるためにうんな事するんかい！！）

ウオツカとベルモットは心の中で呟いた。

「よし、やれ。」

準備が整ったラオチュウ達にジンが命令を下す。

「フオイヤー！！」（何故か独逸語）

二基のランチャーから発射されたミサイルは、見事事務所のビル  
の二、三階に命中して炸裂した。

「よし、ずらがるぞ。」

微笑みながらジンは、ウオツカ達を引き連れその場を離れた。この時彼はあせっていたか、その光景を数人の歩行者に目撃されているのに気付かなかった。これは痛恨のミスと言えた結果、わずか1分後には警察に通報されていた。加えて、警察の動きも素早かった。「ビルがミサイルで攻撃された」という通報から、即テロと判断した米花署は、ただちに近隣の杯戸署やかちどき署に応援を要請して、幹線道路の封鎖にかかり、非常線を張った。こうして、ジンたちは身動きが取れなくなってしまった。

一方、爆破から二十分後、新一達は事務所に到着した。



「ち、畜生！！」

齒噛みしているのは小五郎だ。そりや自分の家が爆破されりや誰だつて怒つて当然だ。ちなみに今ここにいるのは、目暮警部、小五郎、高木刑事、新一の合わせて五人だ。他のメンバーは佐藤刑事の護衛の下、阿笠邸に残っている。

「あ、確か本店の目暮警部ではないですか？それに毛利探偵も。」  
捜査に当たつていた一人の男が目暮に語り掛けてきた。

「おお、君は確か米花署の可児警部じゃないか。」

目暮警部に声を掛けたのは顔見知りの米花署の警部だった。そして、彼から新一達は詳しい状況を聞いた。ミサイルが撃ちこまれた事。室内は爆風で滅茶苦茶になったが、幸い火災は消火器で消し止められる程小規模だったこと。そして、逃げていく犯人と思われる数人のグループが目撃された事。

「じゃあ今回の犯行は集団による物と？」

「木刑事が聞いた。」

「ええ、その可能性が大です。」

そう言われた途端、新一はこの犯行を組織による物だと直感的に感じた。そして辺りを見まわす。やつらがいないか。幸いそのような人物は見当たらなかった。

「ところで毛利さん。こんな時間に何故外出を？しかもお子さん二人も？」

可児警部が素朴な疑問を口にした。しかし、これには小五郎も返答に困った。まさか組織のことを言うわけにもいくまい。それくらいのこととは彼も心がけていた。

「え！？いや、そのお……」

困る彼に助け舟を出したのは目暮警部だった。

「可児君。そのことについては色々あるんだ。今は深く詮索せんでくれ。それと毛利君のことについては他言無用だ。いいな。」

「わ、わかりました。」

こういう時、階級社会というものは便利である。

「それはそうと、その君。」

可児が新一に向かって言った。

「え！」

「今何時だともっているのかね？午前二時半だよ、子供さつさと家に帰って寝なさい。」

「え、けど。」

探偵の彼にして見れば、帰る気は毛頭ない。操作する気満々である。そんな新一に小五郎はそつと耳打ちした。

「我慢しろ新一、今は俺と警部殿にまかせろ。」

「けど、おっちゃんも狙われてるんだぜ。」

「大丈夫。俺はそう簡単にはくたばらん。それにやつらが米花町にいるなら阿笠博士の家も安全じゃない。お前は戻って蘭を守れ。」

「おっちゃん。」

かつこいいぞ小五郎。新一も尊敬の眼差しだ。

「そういうわけだ。さ、とつと高木刑事と行け。」

「え、なんで？木刑事と？」

「バーロオ。子供一人で夜道を行かせられるか。」

これには新一もムツトするが、実際は小五郎の親心みたいな物であつた。結局このあと新一は高木刑事とともに阿笠邸に戻り、そして時間も遅いので眠りについた。

「……・一。新一。起きてよ新一。」

唐突に新一は起こされた。目を開けると、蘭の顔が目の前にあつた。

「ふああ。なんだよ蘭。まだあんま寝てないのに。」

時計を見ると七時半だ。

「もお、それは新一が夜更かししたからでしょ。それよりもTV見てよ。」

「TV？」

新一は起き上がった。ちなみに彼はベットと布団が余ってなかったので、ソファで寝ていた。

TVの前には既に皆が集まり、食い入る様に映像を見ていた。

「おお、工藤起きたんか。ちよつとこれ見てみい。」

平次がいつにも増して真剣な表情で言った。

「だから一体なんなんだよ？」

そして、彼はアナウンサーの声を聞いて絶句した。

「本日、東都市米花町で起きました爆破テロ事件に対し、大曽根首相は武装勢力による我が国への明瞭なる武力攻撃と判断。国民の生命、財産保護のため、戦後始めての治安維持目的の出動を自衛隊に命令しました。これにともなつて朝霞駐屯地を出動した部隊は既に第一陣が米花町に到着したとの事です。」

「何!!」

事態は思わぬ方向へ動き始めた。

## おまけ用語辞典

かちどき署・・・踊る大捜査線よりのリンク。湾岸署のお隣の警察署です。

大曽根首相・・・実在する中曽根さんとは全く関係ありません。このシリーズではある一定の法則で架空の人物の名字を決めています。今回は偶然一致しただけです。この法則は次回より変更予定です。ちなみに気付いた人はすごいと言えます。

上の法則の答えは名鉄（名古屋鉄道）の駅です。

## その時歴史は動いた（後書き）

ようやっと8話目です。次回は自衛隊の動きが中心となります。  
あの護衛艦が米花港へやってきます。あれを載せて。

## 緊張する街（前書き）

前回の投稿作品において誤字脱字が多かった事をお詫びいたします。

## 緊張する街

### 新たな登場人物

梅津一佐・・・海上自衛隊護衛艦みらい艦長。米花港で沿岸警備任務に就く。

角松二佐・・・同艦副長兼船務長。今回は特設陸戦隊第一分隊隊長

尾栗三佐・・・同艦航海長

大神一尉・・・同艦特設陸戦隊第二分隊隊長

ジンの気まぐれは思わぬ所へ影響を及ぼしていた。

ジン達の姿が目撃されていたのは前述したが、最初警察に通報された時は十人前後の集団が小型ロケット2発でビルを攻撃した、という内容だった情報が、首相官邸に届いた時には、三十人前後の集団が攻撃し、ビルが全壊したと言う大げさな内容に何時の間にかすり替わってた。この情報に、大曽根首相は過敏に動いた。元々彼はどちらかと言うと右派であつたし、ただでさえ、2001年の九州沖不審船事件、2004年のTTR線乗っ取り爆破未遂事件、そして昨年の某国工作員イーリス艦乗っ取り事件などで、政府の危機

管理能力を問われていたことも理由であった。特に最後の事件では、乗っ取られたイージス艦とそれと交戦した汎用護衛艦、そしてかけがえのない二百名以上の熟練乗員の命が失われているのである。それに加え、今年は爆弾テロが頻発し、少なくない犠牲者が出ていたのだ。いずれも個人レベルの犯行であったが、いつ国家自身を狙ったテロが起こるかわからないのである。そういうこともあり、大曾根首相の決断は非常に早かった。

午前三時半、自衛隊への出動要請がなされ、また大曾根首相と同じくどちらかと言うと右派である川原都知事も部隊展開に即同意した。とうわけで、東京防衛を担う朝霞駐屯地の部隊に出動命令が下され、午前六時半には最初の部隊が米花町に向かって出発した。

この時出動したのは、偵察警戒車、装甲車、軽装甲車、ジープ、トラック、バイクを中心とする車両六十両、兵員二百十名でだった。この部隊は米花町到着後、堤向津川緑地公園駐車場を臨時野戦指揮所にして状況を開始した。（もっとも、国民のひんしゆくを買ったが。）

一方、上記部隊とは別に、首相官邸、皇居、霞ヶ関官公庁街防衛のため、車両70両、兵員二百四十名が出動した。加えて、ABCテロ（核、生物、科学兵器によるテロのこと）に備え、科学防護部隊も出動した、また、警視庁もSATや機動隊を総動員した。これら全てを合わせると実に七百名近い人員となった。

すごい戦力だ！！と思えるが、実際の所指揮する側は不満だった。なにせ相手はたった三十名のいうなればゲリラ集団。それをこの広い大東京の中から見つけ出すのである。しかも、軍隊のような大規模集団にとって一番厄介なのがこういうゲリラ集団なのだ。何十年も前になるが、北朝鮮の工作員が十名程韓国に進入したことがあった。韓国軍はこれらを殲滅するのに延べ十万の兵員を動員し、半年の月日を費やしたのである。だから兵員七百名というのは心細い数字であった。しかし、左翼や平和団体を抑えるにはこれが限度であった。



この他に、館山基地などから、対戦車ヘリ四機、偵察ヘリ四機、対戦車攻撃機四機、輸送ヘリ六機も出動した。また、横浜の海上保安隊（以後海保）基地では、動ける全ての巡視船と巡視艇を出動させた。また、海上自衛隊（以後海自）も横須賀軍港から、最新鋭ヘリ空母あかぎ、を旗艦とするイージス艦三、汎用護衛艦六からなる精鋭第一護衛隊群を出撃させた。この部隊は東京湾に広く展開し、不審船や潜水艦への警戒、沿岸警備任務についた。米花港の沖合いにも最新鋭のヘリ搭載イージス艦みらいが投錨し、二十四時間体制で警戒に入った。

## 米花港沖合い　みらい艦橋

「艦長、総員戦闘配置につきました。航空隊のSH60Kヘリ、海鳥ともに常時発進態勢につき、発進可能です。」

副長兼船務長の角松二佐（他国の中佐相当）が艦長である梅津一佐（他国の大佐相当）に最終報告を行う。

「よかるう。」

昼行灯とあだ名される彼は、いつもどおりのおっとりとした口調でそう言った。しかし、今の姿からは想像できないが、いざと言う時はかがり火のごとく乗員を統率する海の男であるのだ。

「陸戦隊の方は？」

「手空き乗員から編成しました。二個分隊三十名です。第一分隊は自分が、第二分隊は大神一尉（他国の大尉相当）が指揮を執ります。」

みらいには沿岸警備任務にともない、陸戦隊を編成するよう命令が出されていた。

「しかし五島列島から戻ったばかりだったので、司令部も人使い荒いよな。しかも米花町って今年ものすごく犯罪が起きている所だろ。」

上層部の愚痴を垂れながら、角松の同期であり、みらい航海長である尾栗三佐が艦橋に入ってきた。

「まあそういうな康平。この任務が終われば休みだ。それに、まさか俺達が戦う事になるとは思えんよ。」

角松がなだめた。しかし、そのまさかになるとは彼も想像できなかった。

「けどさあ、せめて荷物ぐらい降ろさせてくれたって良いじゃないか。ねえ艦長。」

「たしかにそうだな。しかし、まさか海自に入って宝石の輸送をやることになるとは思っていなかったよ。」

尾栗の言われ、梅津もなんとなく憂鬱そうに言う。実は未来、つい四日前まで長崎県の五島列島沖で任務にしていたのである。その任務とは、旧海軍の潜水艦の引き揚げを護衛すると言う物であった。

その潜水艦は、帝国海軍最大の大きさを誇り、米本土攻撃に使われる予定であった伊400型であったのであるが、なんとセイルに描かれていた番号が403であったのだ。この番号の艦は欠番となり建造中止となったはずであった。その艦が実在したのだ。そして

防衛庁が調査した結果、この艦はなんと山下財宝と独逸からの譲渡品を運んでいた事がわかったのだ。ちなみに山下財宝とは、旧帝国陸軍フィリピン方面軍司令長官山下大將がフィリピンのどこかに隠したとされる金、銀、プラチナ等の財宝で、その量は連合艦隊が組みなおせる程と言われている。

そしてその引き揚げを行うことになったのであるが、物が物だけに引き揚げ作業に対し護衛艦が護衛についた。みらいはその任務から戻ったばかりのところを駆り出されたのだ。

「なんつて言ったけ、あの宝石。なんか、すごい不吉な名だったような。」

「パンドラだよ航海長。技官から説明を受けただろ。しかし、たしかに不吉な名だな。」

尾栗に対し梅津が言った。

「そう、それですよ。けどあんな宝石始めて見ましたよ。ダイヤモンドの中にルビーが仕掛けられているなんて。」

「まあなんでも第二次大戦中に行方不明になって以来、世界中の宝石愛好家が探しているって言う代物だからな。まあ、とにかく今は宝石より目の前の事だ。尾栗、すまないが後で菊池と一緒に士官食堂に来てくれ、最後の打ち合わせをしたい。」

「ああ。」

二人はそこで会話を打ち切りわかれた。

しかし、あのパンドラがなんと快斗が今いる米花町の目と鼻の先にあるとは、運命とは意外な物である。

同日午前七時五十分　米花町

一方、自衛隊がやってきた米花町では住民達が啞然となってその

光景を見ていた。数十台もの迷彩色の自衛隊車両が一行でやってくるのだ。しかも、装甲車やジープは搭載されている機関銃に隊員が取り付いていていつでも発射できる態勢にあり、またトラックには完全武装の隊員が満載されていた。

「な、なんだなんだ。戦争でもやる気か？」

「クーデターでも起こるのか？」

多くの住民たちが口々にそう言った。そんな中に彼ら少年探偵団もいた。

「す、すげえ。ゴメラでも来るのか？」

元太が目を丸くしながら言った。

「違いますよ元太君。ニュース見なかったんですか？この米花町に凶悪なテロリストが潜んでいる可能性があるから自衛隊が出動したんですよ。だいいち、ゴメラには自衛隊の武器は通用しません。」  
光彦が元太に説明する。

「……」

歩美はだまつたままだが、その表情はものめずらしいものを見ると言つより、何か恐ろしい物を見る目であつた。

「あ、歩美、大丈夫か？」

「歩美ちゃん？」

浮かない表情をした彼女を心配し、二人が声をかける。

「あ、ごめん。」

「それにしてもよお、コナンの家に行く道は通行止めになってるけどどうするんだよ？」

「仕方ありませんから、灰原さんの所へ先に行きましょう。それにもしかしたらコナン君は案外阿笠博士と一緒にかもしれませんし。彼の場合有り得ますよ。」

「そうだな。」

「じゃあ光彦君、元太君。早く行こう。」

「ええ。」

「おお。」

こうして三人は阿笠邸に向かって歩き出した。ああ、またややこしいことになりそうである。

## おまけの用語辞典

某国工員護衛艦撃沈事件……これは福井晴敏先生の某国のイージスからのリンクです。

みらい……海自の最新鋭イージス艦。これはかわぐちかいじ先生のジパングからのリンクです。ちなみに原作で大活躍した海鳥はこの小説でも活躍します。あくまで予定ですが。

伊403……この艦は実際に欠番となった伊400型潜水艦です。ちなみにこの潜水艦はマジック快斗の海賊船浮上せずに登場する艦

と同タイプです。史実では同型艦はパナマ運河攻撃へ用いられる予定でしたが、その前に敗戦を迎えました。戦後米軍の手で自沈処理されました。ちなみに、某東宝映画とは関係ありません。

## 緊張する街（後書き）

自衛隊も動き出し、事が本当に大事になってきました。さあ、ジンはどう動くか。

次回をお楽しみに。

## 新たなメンバー

米花町阿笠邸午前8時過ぎ

「畜生!!」

「一体なんなんやこの問題!!」

新一と平次がパソコンの画面に向かって悪態をつく。

「もう、新一も服部君も落ち着いてよ。」

「そうや、あんたら東西高校生探偵やろ。」

悪態ばかりつく二人を蘭と和葉がなんとかだめよとする。

さて、なぜこの二人がさつきから愚痴をたれているかというと、それは本山が残っていたROMが原因だった。

自衛隊が出動するというアクシデントが起きたものの、さすがに相手が国家権力ではいかに東西高校生探偵や怪盗キッドにしても抗しようがないため、彼らは自分たちのやれることをすることにした。

本山が持ってきたROMは、所長の から託された物であるが、



その数は3枚であった。この内一枚は確実に薬のデータが入っているであろうが、しかし残りの2枚の中身が分からない。その持ってきた張本人である本山は、先ほど目暮警部と一緒に警視庁に向かったのであるが、その際こう言い残していった。

「所長は多分ROMを開けるのに、暗号付きのパスワードをつけたとおもうけど、気をつけてね、所長マニアックな人だったから。それ、じゃあ。」

そういうわけで、暗号と言われて黙っていたのは探偵ではない、と言わんばかりに二人は動いた。寝不足にも関わらず、朝食もそこそこに、暗号解き始めたのであるが、これが曲者であったのだ。

一枚目のROMを、組織のパソコンで見たのであるが、最初の画面で出てきたのがこれである。

名投手、沢村栄治が最後に所属していた軍は？（間違えた場合、20秒以内に正解を答えよ。さもなくばデータは自動消去する。）

このような物であった。

「簡単や、こんなもん巨人軍やろ。」

平次がそう答え、新一も同調した。そして、二人は入力した。しかし、

ERROR!!

「何!!」

なんと間違えた。

「巨人軍じゃなきゃ、なんだって言うねん!？」

「落ち着け、服部。確か沢村選手って戦争で死んだ悲劇の投手だったよな・・・あ、わかった!!」

新一は急いで新たな文字を入力した

大日本帝国陸軍

そして……………

G R E A T ! !

「「よっしゃ!!」」

二人は見事解いた。これで開く……………わけではなかった。す  
ぐに次のような文字が出た。

新五色旗の色を上から順に答えよ

「何だと!!」

驚嘆する二人。

「一問じゃあねえのか？」

「工藤、こうなったら考えるしかないで。けど、五色旗ってこの旗や？」

確かに、五色旗なんていわれてもピンとこない。

「一体どこなんや？フランスは三色旗。イギリスはユニオンジャック。アメリカは星条旗やろ。」

「わかんねえ!!」

そして最初の行に繋がるわけである。

東西高校生探偵にしてもわからない五色旗とは、一体どこの旗であるのか？こういう場合は情報を集めろ、である。

「灰原!!」

ずっと傍で黙って見ていた志保を新一が呼びつけた。ちなみに、彼が偽名で呼んだのは、まだ本名で呼ぶのに慣れてないからだ。

「な、何!？」

突然の指名に驚く志保。

「インターネットを使って五色旗で調べてみてくれ。」

「わかったわ。」

すぐに志保はパソコンの電源を立ち上げ、インターネットに接続し、調べ始めた。ちなみに彼女が使っているのは、元々博士の家にあったものだ。

「ったく。こんな問題ばっかだよ。」

「ほんまにおたくが作るようなもんやな。」

「これならそうそう簡単に解けねえって思ってたんだろうな。」

「そりゃあ、こんな問題ばっか出されりゃ、誰だって嫌になるわ。」

二人が感心したように言う。

「もう、二人とも感心してないでちゃんと解いてよ。」

「そうや、ちゃんとやらなデータが消えて解毒剤作れんのやろ。」

蘭と和葉が怒りながら言う。まあ、確かにもし新一と平次がヘマをした暁には、7人全員二度目の十年分の人生を送りかねないのだから仕方がない。

「わかつてるよ。」

「わかつてるわい。」

二人同時に言う。

「こつちもわかつたわよ。」

志保がようやく答えを探し当てたようだ。

「本当か、灰原？」

「ええ、新五色旗とは、満州国の国旗の事よ。」

「満州国って？ええと、どこかで習ったことあるわよね新一？」

蘭が新一に聞いて思い出そうとする。

「満州国っていうのは戦前に日本が今の中国の吉林省に作った傀儡国家のことだよ。」

「そんなことより、どんな旗なんや。」

「これよ。」

志保が画面を新一たちに見せる。

新一と平次がディスプレイを覗き込むと、黄色を下地にして、隅に四色の小さな四角形があしらわれた国旗が映っていた。なるほど消えてしまった国旗では早々わからない、加えて満州国はたった十年ちよつとの歴史で幕を閉じた幻の国だ。例えば国旗図鑑を見ても載ってはいまい。

「これだと、上から赤、藍、白、黒、黄色だな。」

そして、新一はパソコンに打ち込んだ。

結果は・・・・・・・・

おめでとう

「よっしゃあー!!」

「開いたでえ。」

そしてROMの中身を開くと、凄まじい量の化学式が現れた。

「すごい、APTXだけじゃなくて、今まで組織が作ってきたほとんどの薬のデータが入ってるわ。」

志保が食い入る様に画面を見る。

「やったね新一。」

「ああ、これで二人一緒に元に戻るぜ。」

喜び合う新一と蘭。

「さあ、残りの二枚も見ようや。」

「ああつて、・・・・うん!？」

新一が何かに気づいたようだ。

「どうした工藤？」

「あれ。」

三人が新一に言われた方に振り向くと、三人の子供が窓から中を覗いているのが見えた。

「ああ！歩美ちゃんに元太君に光彦君。」

蘭が驚く。一方驚かれた三人は。

「おい、見つかつちまつたぜ。」

「どうしよう光彦君。」

「仕方ありませんね、こうなったら開き直って堂々と行きましよう。」

そして三人は堂々と玄関から入ってきた。

「つたく、覗き見すんなよ。それに小学生は学校の時間だろ。」

新一が半ば呆れ顔で言った。時計は既に九時を指している。

「なんだよ、俺達はただ灰原を迎えにきただけだぜ。」

「そう。それにもかしたらコナン君博士の所にいると思って。」

「そして来たら、中から変な声がしたもので。」

三人が言い訳する。

「なんでそれで中に入って来なかったんだ？」

「だって、もし強盗とかだったらと思つて。」

「それで窓から覗いたわけやな。」

急に会話に割り込む平次。

「おい服部、なんでお前がそこで口挟むんだよ。」

「うるさいわい。」

服部と言ふ言葉に、探偵団の三人は反応した。

「服部って。」

「やつぱり。まさかとは思つたけど、あなた、平次お兄さん。」

歩美と光彦の言葉に、しまったという顔をする新一。

「新一、そんな顔してもいまさら隠しようがないよ。」

「そうね、それに隠す意味ももう無いみたいだしね。」

「は、灰原。」

新一は志保に言葉にあまりいい気がしなかった。まあ、確かに以前は何度も言うな言うなと念を押されたのだ。しかも、そのために

偽物とはいえ拳銃を突きつけられもした。だからといって、子供たちに今さら正体を隠す必要も無いのも事実だった。

「わかったよ。それじゃあ、まずは俺から。俺の本名は工藤新一だ。」

その言葉に、少年探偵団の面々の顔が青ざめた。

「く、工藤新一って。」

「あ、あの。」

「幽霊屋敷の。」

ズテ！！（新一がこけた音。）

「なんでそうなる！！」

本気で怒ってる。

「もう、新一。相手は子供なんだから、そんなに怒る事無いじゃない。あ、じゃあ今度は私。私は蘭。毛利蘭よ。」

「そしてワイは服部平次。」

「うちは遠山和葉。」

少年探偵団の三人が再び驚く。コナンとしてしか会った事がほとんど無い新一はともかく、他の三人が高校生であるのはちゃんと知っているからだ。

「じゃあ、哀ちゃんも。」

「そうよ、私も宮野志保っていうのが本名。それに歳もこの四人より1つ上の十八よ。」

三人はしばらく固まってしまった。まあ大人が子供になるなんて常識的に見て有り得ない。しかし、目の前の現実はその考えを打ち砕いてしまっているのだ。

数分して、元太が口を開いた。

「おめえらどうして小さくなっちゃってるんだ？」

「そうです。それですよ。」

「蘭お姉さんは、こないだあった時は大きかったよね。」

「それは今から話すよ。」

そして四人は子供達にわかりやすく、今までの事を話した。

「こういうわけさ。」

三人は開いた口が塞がらなかった。まあ、普通黒の組織やら、身体が縮むAPTX4869等と言われても信じられる筈が無い。

「……」

「さ、わかつたらお前らはさっさと学校へ行けよ。」

「「え！」」

「今回の事件は相手がでかすぎて、少年探偵団には荷が重過ぎる。」

「そうね、工藤君の言うとおうりだね。さ、あなたたちはさっさと行きなさい。」

新一と志保は三人を追い払おうとする。無論彼らの安全を気にしてのことだ。

「いやだぜ。」

「いやです。」

「いやよ。」

三人とも拒否した。

「お、おめえら言っただろ、相手は人を殺す事をなんとも思わない凶悪な連中なんだぜ。そんな事件におめえらまで関わらせたくない。大事な仲間を、これ以上危険な目に遭わせたくない。」

新一はいつにも増して強く言った。とにかく彼らをこれ以上巻き込みたくない一心で。子供の姿になってからの数ヶ月、彼らとは何度も危機を乗り越え、あまつさえ命を助けられもした。それら全ての思い出は忘れられない物であり、そして彼らは新一にとって無二の親友とも言える。だからこそさっきの台詞が出たのだ。

「いやです。」

最初に答えたのは光彦だった。

「僕達は探偵団の仲間でしょう。コナン君や灰原さんが大人だろうとそんな事関係ありません。」

「そうよ、私達いつも一緒に事件を解決してきたじゃない。」

「そうだそうだ。」



「おめえら、まだ言うのか。」

「なんといわれようと、僕達はここから出て行きません。」

三人の表情はいつにも増して真剣だった。

「工藤君。彼らを追い出すのは無理のようね。こうなったら手伝ってもらったほうがいいんじゃないの。」

志保は説得は無理と思ったらしい。

「けど。」

「工藤、おまえさっき言ったやろ。大事な仲間やって。だったらその仲間を信用してやったらどうや。」

「そうよ新一。歩美ちゃんたちだって役に立つかもしれないわよ。」

「……………」

新一はしばらく黙ってうつむいていたが、ふいに顔を上げた。

「本当に良いんだな、おめえら。」

三人ともその言葉にうなずく。

「だったら、よろしく頼むぜ。」

この瞬間、少年探偵団の参加が決まったのであった。

一方、そのころ帝丹小学校では

「もう、探偵団全員揃ってずる休みね。まさか、顧問である私をさし置いてまた事件に首突っこんでるんじゃないでしょうね。」

小林先生が大正解の愚痴をこぼしていた。

そして帝丹高校では。

「おい、今日は毛利も休んでるぞ。しかも学校への連絡はないらしいぜ。」

「まさか夫婦そろって駆け落ちか。」

「（＼＼） キャア」（これは女子の声）

「蘭ッたら、親友である私になにも言わずそんなことを。」（これは園子のセリフ）

と本人達の苦勞も知らず、生徒達が騒いでいた。そしてこれと同様の光景は改方学園や江古田高校でも見られたのであった。

## 決断

「また、会えるよね？」

子供の声が聞こえる。どうやら夢の中のようなだ。

「ああ、俺はちゃんとまた会いに来てやるよ。」

「約束だよ、約束。」

間違いない、これは夢だ。ジンがそう思い始めた時。

「……………き……………兄貴。」

「うん？」

ジンはウオツカに起こされ、目を覚ました。

「ああ、寝ちまつてたか。」

「すいません。けど、みんな集まりましたぜ。」

「そうか。」

ジンとウオツカは、他の構成員達が集まった場所に移動した。

「おい、五、六人足りないぞ。」

構成員達を見るなり、ジンが言った。出発した時は三十人だった構成員の数が欠けていた。

「ジン、無理言うんじゃないぜ。察に加えて自衛隊まで出張っていて警戒しているんだ。六人しか欠けなかった方が奇跡だぜ。」

スネイクが言った。どうやら自衛隊や警察に阻まれて集まれなかったらしい。

「そうか。」

「で、なんなんですか。急にこんな苦労させてまで呼び出して。爆破部隊の隊長であるラオチュウがジンに聞いた。他の構成員達も同じ事を聞きたいような顔をしている。」

「おう、本題はそれだ。さて、お前らの中には既に聞いているや

つもいるかもしれないが、先ほど支部長から連絡があつてな。組織は日本支部の解散を決めたそうだ。」

その言葉に、構成員達の間で動揺が走った。しかし、スネイクやラオチュウ、そしてベルモットらベテラン達は微動だにしない。

「つまり俺達は巢を失った渡り鳥。いや、場合によっちゃ組織からも追われる鴨になったわけだ。そこで、俺はお前らに言っておく。今や俺は実行部隊の長でさえない。お前らと同じただの人だ。だからお前らはもう好きにしていんだぞ。」

ジンの言葉に対し、構成員達は顔を見合わせる。

「好きにしろとはどういうことでしょうか？」

一人の若い構成員がおずおずジンに聞いた。

「そのままだ。察に自首するもよし、逃げるもよし、お前らが自分で考える事さ。」

それからしばらく、沈黙が場を支配したが、スネイクがそれを破った。

「ジン、お前はとうするつもりだ？ 察に自首するか？」

「いまさら自首したって死刑さ。こうなったら、察に自首した本山の野郎を道連れにでもしてやるさ。」

「だったら俺も付き合うぜ。どうせ帰る場所はないんだ。だったらヤケクソになって戦ってやるぜ。」

そのスネイクの言葉にラオチュウが賛同する。

「自分もついていきます。こうなったら自衛隊だろうが、警察だろうが、探偵だろうが、組織だろうが、自分達にはむかって来たら最後の一発まで戦って、後は知りません。」

「俺もついていきますぜ。」

ジンの相棒のウォッカも賛成する。それが火付け役になったように、他の構成員からも賛成の声が上がる。

「俺も。」

「俺も行きます。」

「自分も。」

最終的に、19人が残った。そんな中、ジンは隅にいたベルモットに声を掛ける。

「ベルモット。お前はあの人のお気に入りだ。いまから急いでアメリカへ行けばなんとかなるかもしれないぞ。」

それに対し、ベルモットはいつもの笑顔で言った。

「あら、私もあなた達についていくわよ。いまさらそんな卑怯なまねなんかしないわよ。」

「ふ、馬鹿野郎どもが。よし、そうと決まったら今後の行動を計画するぞ。」

そして、打ち合わせを終えると、それぞれの役割を果たすべく、散らばっていった。

「ヤケクソか、それもいいな。俺たちの底力見せつけてやるぜ。」  
構成員たちを見送りながら、ジンがそっとつぶやく。

「兄貴、行きますぜ。」

ウオツカが呼ぶ。

「おう。」

そして彼らは、愛車のポルシェ356に乗り込んで出発した。ジンたちは最後の決戦に挑もうとしていた。

## 同時刻 阿笠邸地下室

志保は地下室で薬の成分の解析を行っていた。

「はあ。」

志保はパソコンを動かす手を止め、今日何度目かになるかわからないため息をつく。

彼女が悩んでいる理由、それは解毒剤を作った後の自分の立場であった。

彼女に既に家族がいないのはご承知のとおりである。また、黒の組織に入っていたというのも彼女の心に影を落としていた。そんな自分が今後社会で生きていく場があるのか。そんな不安があったのだ。しかし、何より彼女の心に影を落としていたもの、それは。

「工藤君。」

そう、新一の事である。実は（というよりも原作でも確実に思われる。）彼女は新一が好きであったのだ。最初は研究の対象としか見ていなかった。しかし何度も助けられ、守ってもらっていくうちに、彼女は彼に惹かれていった。しかし、彼には蘭という生涯最愛の人がいる。とてもではないが、好きとは言えない。いや、万が一兆が一という可能性はある。言えないことはない。彼女自身言わないだけである。なぜそうしているかは自分自身でもわからない。とにかく、言えないのだ。

「はあ。」

彼女の悩みは深い。そこへ。

「おい、灰原。」

新一がやって来た。

「え。な、なによ。あなたは上で暗号解いていたんじゃないの？」  
自分を落ち着かせようとする志保。

「ああ、なんとか解いたぜ。」

新一はようやくあのマニアックな問題との格闘を終えたようだ。  
ちなみに、その問題は以下のとおり。

横浜の姉妹を失いし老嬢とは何か。      ヒントNY

広島の前爆投下機、エノラ・ゲイの名前の由来は機長の何から来ているか、答えよ。

ご苦労様でした

「で、お前こそどうしたんだよ。手が止まつてゐないだぜ。」

「え、ちよ、ちよつと疲れただけよ。」

まさかあなたが好きと言っか悩んでいたなんて言えない。

「ふうん。じゃあ気晴らしにラジオでも聞いたらどうだ。」

そうやって、部屋においてあったラジカセに近づく。

「多分ニュースしかやってないわよ。」

志保がそう言うが、流れてきたのは明るい曲であった。

「え!？」

その歌が伝えていたのは、素直な心になること。そしてそこから未来へつなげることであった。

「素直な心ねえ。」

新  
一  
が  
つ  
ぶ  
や  
い  
た。

「お前も素直になれよな。」

新一が志保にそう言った。

「じゃあ、俺は戻るから。がんばれよ。」

そう言って戻ろうとする新一。しかし、志保はある決意を固めていた。

「待って。」

┐  
?  
┐

「あなたが言ったとおり、素直になってみようと思うわ。……」

「わ、私、あなたが、工藤君が好き。」

[illegible]

「あああああ！！！！！！！！！」

叫ぶ新  
一。

「あのさ、灰原。おめえわかってるよな。俺が好きなのは蘭だつて言う事。」

「わかってるわ。けど、私はあなたがすきになってしまったの。けど、よく考えれば私とあなたとは住む世界が違うわ。例えば蘭さんがいなくても、私なんか……」

志保は黙ってしまった。

しばしの沈黙を破って、言葉を紡いだのは新一だった。

「そんなことないぜ。」

「え？」

「お前が優しくて、壊れやすい人間だってことはわかってるぜ。確かに、お前は罪を犯していたかもしれない。けど、それを自覚し償おうとしているんだから、それでいいんじゃないのか。そして、人を好きになるのは誰だって有ること。むしろ自然な事さ。……おめえは本当にいい奴だよ。もし蘭がいなかったら、あながちおめえの事を好きになっていたかも知れないぜ」

「工藤君。」

「けど、今俺が愛してやれるのは蘭だけなんだ。ごめん。」

「いいのよ。」

「え！」

「あなたにそう言ってもらえただけでもうれしい。私ずっとあなたに好きって言おうか迷っていたの。どうせふられる、けどもしかしたらつてずっと思っていたの。だから反ってすっきりしたわ。」

「灰原。」

「さ、作業を続けるから。それに工藤君昨日あまり寝てないんだよ。少し休んだら。」

「ああ、そうするよ。それじゃあ灰原も頑張れよ。」

「ええ。」

そして新一は戻り、志保も何事も無かったかのように、作業を続けた。ただ、このことが二人に与えた影響は大きかった。

ちなみに、実はこの光景を平次や快斗達に見られ、この後冷やかされる事になるのは、別の話である。





## 決断（後書き）

BREAKDOWN第11話どうでしたか？感想ください。

クイズの答えですが、第一問目は氷川丸、第二問目は母親です。答えの理由を聞きたい方は連絡ください。

交  
戦

昼下がりの米花町の歩道を、六人の子供達がキャツキャ話し合いながら、歩いていった。

歩「蘭お姉さんはコナン君、じゃなかった。新一さんが好きなの？」

蘭「え！そりゃあ、まあ。」

和「蘭ちゃんなあ、昨日工藤君に告白したんや。」（実際は逆。）

青「そうそう。」（だから違うってば。）

歩「ええ！！」

元「え、まだしてなかったのか？」

光「それは意外ですね。」

蘭「もう、やめてよ。それに和葉ちゃんや青子ちゃんだってそうじゃない。」

蘭が逆襲に転じた。

和「蘭ちゃん！それ言わんといてや！」

青「恥ずかしいよ！」

と、こんな他愛の無い会話（？）をしながら歩いているのは、蘭、和葉、青子、そして探偵団の3人組の計6人であった。彼らはこれから商店街に、夕食の食材の買出しに行こうとしていた。ちなみに、新一と平次はお休み中。快斗は寺井さんまで呼びつけ、阿笠博士と一緒に探偵グッズの整備をしていたのでここにはいない。

その横を、二台のバイクが通り過ぎた。迷彩服を着込み、体の前に小銃を引っ提げた自衛隊員が乗っていた。パトロール中の偵察隊のバイクであった。

光「なんか、物騒ですね。」

全員がそう思った。その暗くなつた雰囲気打破する一言を蘭が言った。

蘭「大丈夫よ。新一や服部君が直に解決してくれるわよ。」

歩「そうよね。なんつていっても東西の高校生探偵だもんね。」

和「そうやそうや。さ、行こうや。」

そして六人は再び歩き出した。蘭としては、言ったとおり、組織は新一が倒し、自分達も解毒剤を飲んで元に戻れて、めでたしめでたしになることを期待していた。しかし、めでたしめでたしとなるのは、昔話の話である。理想と現実とは中々一致しないものだ。

さて、その探偵団の横を通り過ぎた偵察隊は、米花町1丁目から2丁目にかけての範囲をパトロール中であつた。

2丁目の22番地付近を走っていると、突然、1号車の島三尉（他国の少尉相当）が止まつた。後続していた2号車の有利士長（他国の上等兵相当）も慌ててバイクを止める。

「どうしたんですか、三尉？」

急停止に驚く有利士長。

「あれ。」

そう彼が言つた方向には、いかにもというような感じの黒ずくめの格好をした5人の男がいた。

「あ、あいつらまさか。」

有利士長が驚いている間に、島三尉は無線で連絡を入れる。

「こちら島三尉。米花町2丁目22番地付近にて、黒ずくめの不審な五人組を発見。指示を請う。」

「こちら野戦指揮所。島三尉。注意しつつ、その五人組を尾行せよ。近辺をパトロール中の02、03号車も支援に向かわせる。」

「了解。オーバー。」

そして、通信を終え、彼らはバイクを発進させる。しかし、直に相手は角を曲がって見えなくなつてしまつた。

「あ、三尉。見えなくなつてしまいましたよ。直に追いかけてみましょう。」

「いや、ちよつと待て。」

「!？」

驚く有利士長をしりめに、彼は角の手前でバイクを降り、そして慎重に角の向こう側を見ようとした。そして、顔を出した瞬間。

バーン!!

男達が銃をこちらに向け、そして撃ってきた。

「さ、三尉!!」

「大丈夫だ。こちら島三尉。発砲を受けた。反撃の許可を願います。」

「こちら野戦指揮所。発砲は許可できない。間もなく02、03号車が着くから、なんとか持ちこたえろ。」

「了解、オバー。畜生、撃つなだ。」

と、そこへ02号車である軽装甲車が到着した。

「車長の伊庭三尉です。」

彼の言葉とともに、三名の隊員が降りてきた。さらに、一人は屋根を開けて機銃を構える。

「応援感謝します。偵察隊の島三尉です。」

「敵は？」

「この角の向こう側です。」

「了解。ようし、角の向こうへ前進しろ!」

命令とともに、軽装甲車は角の向こう側へ出る。その途端、バンバンという発砲音と、カンカンという車体に弾が当たる音がする。

「ちつ、野郎め、陸上自衛隊をなめんな!全員03号車が到着したら状況開始だ。」

「了解!」

感情的になっている伊庭をよそに、隊員達は元氣よく答えた。ちなみに、状況開始とは、作戦開始のことである。自衛隊は軍隊ではないので作戦開始とは言わない。そして彼らは作戦の準備を始めた。

一方、見つかったのはスネイクとラオチュウを始めとする五人組であった。彼ら五人だけ何故ここにいるかというと、実はジンたち御一行が別の場所を襲撃するため、警察の目を向ける囷役として動いていたので。ちなみに、彼らが狙っていたのはなんと工藤邸だ。これは、以前彼らが調査していた場所が分かっていた事と、世間に名をはせる高校生探偵の自宅を襲撃すれば、警察の捜査を大いに攪乱できると踏んでいたからであった。しかし、その野望はもろくも崩れ去った。

「どうするんだスネイク！！見つかったぞ、しかも自衛隊に！！」

ラオチュウが叫ぶ。

「どうする、こつちには拳銃とわずかな爆薬（に相当するもの）しかない。爆薬持ってカミカゼするか？」

ラオチュウがとんでもない事を言い出した。

「馬鹿野郎、落ち着け。いいか自衛隊つてのはそう簡単に発砲はしない。とくにこんな市街地じゃな。だから、ここは地理を生かして逃げるぞ。狭い路地に逃げ込めばこつちのものだ。」

さすがスネイク。妥当な判断に出た。確かに、パンパンと十発程度しか打てない拳銃と、毎分八百発の発射速度、三十発のマガジンを持つ小銃とで戦おうなんて自殺行為に他ならないからだ。

「あの、スネイクさん。」

下っ端の一人がおずおずと何かを言おうとする。

「何だ！？」

「後ろも自衛隊に塞がれましたけど。」

「ああん！？」

見ると、退路にはいつの間にか現れたのか、自衛隊のジープが道を塞いでいた。



「げ!!」

「どうするんだスネイク!」

八方塞り、四面楚歌としか言いようが無い。さらに

「抵抗しても無意味だぞ、いさぎよく降伏せんかい。」

拡声器で降伏勧告が響く。

そして、彼は腹を決めた。

「こうなったら、最後の一発まで抵抗だ。」

そして彼は銃口を自衛隊の方に向けた。

「全く聞く耳持ちません!」

部下が叫ぶ。スネイク達が再び発砲してきた。

「ふん。ようし、状況開始だ。03号車。」

無線で03号車を呼び出す

「はい、こちら03号車。」

「例のをやるぞ。」

「了解。オーバー。」

交信を終えると、彼は左手を上げた。

「よい!!」

その言葉とともに、他の隊員たちが銃をスネイク達に狙いを定める。

そして、彼は手を振り下ろして叫んだ。

「てっ!!」

一斉に隊員達が銃の引き金を引いた。その途端、小銃と軽装甲車の車載機関銃の発射音が当たりに鳴り響いた。

「うわ!!」

「ぎゃあ!!」

突然の銃火にさらされ、構成員達はパニックに陥る。一歩間違えばPTSD（戦場などで起こる精神病）になりかねない状況だった。とにかく、すさまじいばかりの光の線が彼に襲い掛かっていた。

「うん？」

そんな中、スネイクはおかしなことに気づいた。

「どういうことだ、こんだけ撃たれているのに全然当たらないなんて？まさか。」

スネイクはこのからくり気づいた。

「みんな落ち着け。これは見かけ倒しだ。やつらが撃っているのは模擬弾だ。当たって死にはせん。」

さすがベテラン。自衛隊のやっていることに気づいた。実は、伊庭三尉達は実弾が使用できないから曳光弾を使っていたのである。この弾は、映画や記録フィルムなんかで黄色い線をひく弾で、通常は弾道の修正に使い、4発に1発の割合ぐらいで混ぜられている。しかし、今回は全て曳光弾のマガジンを使っていたのだ。これではいくら当たっても死にはしない。ただし、目に見える恐怖は数倍だ。

「落ち着くんだ!!」

スネイクは叫ぶが、銃声がそれをかき消した。それどころか、構成員達はとも戦えそうに無かった。

「くそ。」

と、いきなり銃声がやんだ。

「??」

「音響閃光弾、煙幕弾投擲！！」

射撃をやめさせ、伊庭三尉は新たな命令を出す。  
隊員たちが、次々と音響閃光弾と煙幕弾をスネイク達に投げつけた。

「全員、目と耳を塞げ！！」

その途端、辺りに強烈な閃光と音が辺りに広がった。

「ようし、着剣！！」

閃光が消えると、伊庭三尉は新たな命令を出す。隊員たちが銃の先にナイフを装着する。

「突撃！！」

「おお！！」

日本お得意の銃剣突撃が始まった。（つておいおい。）

自衛隊員達は、未だ目と耳を奪われ、煙幕にむせる組織の構成員達に襲い掛かった。そして、その結果は明白だった。銃床で拳銃を叩き落され、そのあと銃剣を向けられた彼らに勝ち目などなかった。結局、彼らは何が起こったかも把握できぬまま、両手を挙げるしかなかった。

「やりましたね三尉。」

「うむ。」

伊庭三尉も満足気だ。しかし。

「三尉、四人確保！」

部下の報告に、伊庭三尉の表情が引き攣った。

「四人だと、五人じゃないのか!!」

その言葉の意味するものは、直に現実となった。煙幕の中から一人の男が、突然這い出した。

「あいつだ、捕まえろ!」

だが、時既に遅し。その男は走り出した。おまけと来て、その前方には数人の子供の姿が見えていた。

「げ、まずい!!」

悪夢は現実となった。男は、その中の一人を抱き上げ、人質に取ったのだ。そしてその子供は、銃声を聞きつけ戻ってきた探偵団のひとり、歩美であった。

「キヤアー!!」

歩美が悲鳴をあげる。

「「歩美ちゃん!!」」

蘭と和葉が叫ぶ。しかし、二人はここで大いに今の自分達の状況を認識させられる事となった。これが、元の体なら空手と合気道で助け出せるのに。しかし、それが出来ない。また、蘭は今まで新一が置かれていた状況をも実感せざる得なかった。

「その子を離せ!!」

追いついた自衛隊員が小銃を向ける。しかし、スネイクは悠然としていた。

「ふん、撃てるものなら撃ってみな、その模擬弾しか出ない銃でな。」

「く。」

いくら最新の装備を持っても、このような状況ではどうにもならない。銃で平和は守れないとはよく言ったものだ。一方、スネ

イクも無闇に動けない状況と成ってしまった。ここで逃げても直につかまるのは目に見えていたからだ。

あたりを静寂が包む。

数分して、突如キーンという音がしてきた。

「何だ？」

音はようやく煙幕が晴れつつあった工藤邸の方角からだった。そして、一台のスケボーが煙幕を突き破るようになして現れた。

「おお!!」

あっけに取られる自衛隊員達。そんな彼らを、スケボーはすり抜けていく。そして、それに乗っているのは。

「新一！」

「快斗！」

そう、乗っていたのはこの二人であった。ちなみに新一は前に、快斗は後ろに乗っている。

「何だ!？」

驚いたのはスネイクも同じだった。しかし、そのスケボーが自分に向かって来ているのは分かった。

「来るな!!」

スネイクは拳銃を向ける。しかし、それを快斗がトランプ銃で撃ち落とす。そして、新一がスネイクに時計型麻醉銃を撃ち込む。こうして、工藤邸前での戦いはあっけなく終わった。

おまけ

自衛隊とスネイク達が銃撃戦を始めた頃。

「新一、何かすごいことになってるぜ。」

快斗が言う。

「貴方の家も大変ね。お化け屋敷にされたり、組織に調べられたり。拳句の果てに前で銃撃戦なんて。」

志保も同情気味に言う。

そして、新一は拳を振り上げ叫んだ。

「人ん家の前でドンパチするんじゃないっ!!!!」

## 交戦（後書き）

というわけで、なんとか完成12話です。この話は自衛隊と組織が戦ったらという作者の趣味丸出し作品です。最後のところはあっけなさ過ぎると思われるかもしれませんが、これは次回への伏線です。というわけで、次話にご期待を。って書けるかな？





新「おめえら、大丈夫か？」

蘭「うん、全員無事よ新一。」

新「そうか、よかった。」

蘭の言葉に、新一が胸をなでおろす。しかし、そこへ予想できないハプニングが。

歩「ありがとうコナン君！！」

歩美が新一に抱きついた。

新「え！え！ちよ、ちよつと歩美ちゃん！？」

困惑する新一。そして蘭と光彦と元太はそんな彼を嫉妬の目で見つめ、他のメンバーはニタニタ笑っている。

歩「あ、ごめんなさい。新一さん。」

彼女はようやく回りに気づいた。そして、新一は何と言えばいいのか分からなくなった。辺りを沈黙が支配したが、それはほんの少しの間であった。

伊「君。いやあ、さつきは本当に助かったよ。」

一人の自衛官が新一の元に来て言った。伊庭三尉であった。そして、ピシッと敬礼する。

伊「民間人のご協力感謝します。自分は陸上自衛隊第35普通科連隊の伊庭義明三尉だ。しかし、君は何者だね？」

伊庭三尉が微笑を浮かべながら聞いた。それに対し、新一はいつものきめ台詞。

新「江戸川コナン。探偵さ。」（小さいなままなので、名乗るのはコナンの方）

伊「ほう、探偵か。さてよ、江戸川コナン？ああ、新聞で見たことがあるな。確かキッドキラの小学生だったな。（この瞬間快斗はめちゃくちゃ嫌そうな顔をした。）そうかそうか、いや、しかしまさ

か自衛隊が探偵に救われるなんて、事実は小説より奇なりだな。」

と、そこへ一人の隊員がやって来た。

「三尉殿、警察が到着しました。」

すぐに彼のもとに、新一たちには見覚えのある刑事がやって来た。

高「警視庁捜査一課の高木巡査部長です。」

伊「陸上自衛隊の伊庭三尉です。」

歩「あ、高木刑事。」

歩美が驚きの声を挙げた。

高「あ、君達か。一体こんな所で何やっているんだい？」

伊「え、刑事さんはこの子達と知り合いなんですか？」

高「ええ、まあ。それよりも、この子達がどうしてここに？」

新「ああ、実は……」

新一が事態の説明をする。

高「なるほどね、全く君たちは本当に事件と縁があるね。」

高木刑事が呆れながら言った。

伊「あの、高木さん。お話中申し訳ないが、連中の身柄を正式に引き渡したいのですか？」

高「ああ、すいません。」

伊「確保した五名の身柄をお引渡しします。」

高「五名の身柄をお引き受けします。けど、たった五人だけですか？」

高木刑事が怪訝な表情になる。

伊「ええ、我々も腑に落ちないのですが、とにかく確保したのはこの五人だけです。」

「おい、おまえら。他に仲間はいないのか？」

一人の自衛隊員が、構成員の一人に怒鳴る。

伊「おい、それは警察がやることだ、やめろ。」

伊庭三尉が止めようとするが、その構成員は薄ら笑いしながら呟いた。

「ふふふふ、今さらあいつらを追ったって無駄だぜ。」

全員「え!!」

「あいつらなら今頃……」

伊「なんてこつたい。おい!!緊急事態だ、直に野戦司令部に連絡を。」

高「無線機で連絡を!!早くしないと取り返しのつかない事態になる!!」

構成員の言葉に、警官と自衛官が大騒ぎし始めた。

快「まさか、やつらそんなことを!?!つまり、こいつらは警察の目を引き付けるための、ただの罠だったのか。」

連行されていくスネイク達を見ながら、快斗が悔しそうに行った。

新「くそ!!」

蘭「新一!!」

蘭が言うより早く、新一はスケボーに飛び乗って行ってしまった。

和「あああ、行ってもうた。」

光「新一さん、一人で行って大丈夫でしょうか?」

快「んなわけねえだろ。寺井の爺さんか阿笠の爺さんに頼んで、すぐに車を出してもらって追うぞ!!」

全員「おう!!」

というわけで、残った(残された?)全員は阿笠邸に移動した。

阿「何!!新一が一人で行ったじゃと!?!?わかった、すぐ追いかけ

よう。」

志「全く、工藤君は何を考えているのかしら？」

平「ほんまや。しかし、工藤のやつ、こんなんでよく今まで生き残った来れたのう。」

平次の言葉に、一名を除いて納得した。その一名とは、和葉であった。

（それはあんたもや！！）

と彼女は考えていたそうだ。

「何ですって？武装集団がここを襲撃する？ハハハ、ご安心を、現在機動隊が守りを固めています。そうそう簡単には手出しさせません。例え襲つてきても、一步も手出しはさせません。」

無線に向かって自信満々に答える警備隊長。と、その足元で、何か金属の物体が転がる音がした。

「うん！？」

結局、彼はその黒い塊を見て、声を上げることは出来なかった。なぜなら、次の瞬間、彼の意識は凄まじい爆炎に飲まれてしまったからだ。その爆発と閃光は、近くにいた機動隊員数名の命をも道連れにしていた。そしてそれは、警視庁に黒の組織が襲撃を開始した合図となった。また、それは警視庁が、2・26事件以来70年ぶりに武力襲撃を受けた事も告げていた。

## 本当の目的（後書き）

感想ください。



さて、そのころ阿笠邸では、先に行った新一の後を皆が追おうと  
していたが。

阿「よし、皆乗れ！！と言いたところじゃが。」

蘭「乗れるわけないでしょ博士。」

今ここに残っているのは、蘭、平次、和葉、青子、探偵団の三人、  
そして博士の計八人である。対し、博士のワーゲンはどんなに乗せ  
れても六人が限度である。つまり、二人は確実に置いてきぼりを喰  
うことになる。ちなみに、快斗はもう一台のスケボーで新一を追っ  
かけたので既にいない。

とにかく、これでは出発できない。最初に意見をしたのは平次で  
あった。

平「よっしゃ、だったら探偵団の三人は子供なんだから残れや。」

平次としては軽い気持ちであったのであろうが、これにたいする  
三人の反発は彼の予想以上であった。

歩「ええ！！ひどい！！私達は新一さんと同じ少年探偵団の一員  
なのよ。」

光「そうです。平次さんがそんな薄情な人とは思いませんでした。

元「それによう、今は平次兄ちゃんだって子供じゃねえか。」

これには平次も一瞬ひるんだ。

平「うー！！屁理屈言うんやない！！それにおまえらなんか足手ま  
といにしかならへんで。」

これがさらに三人の怒りを助長した。

探偵団「なんだって（なんですって）！！」

こんなことをしているうちに時間は過ぎていき、それがさらなる  
問題を引き起こした。

？「あんたたちなにやってるの？」

後ろから聞き覚えのある声がする。全員が振り向くと、そこには蘭「そ、園子――！」

そう、そこに立っていたのは蘭の親友である鈴木園子であった。

園「え？どうして私の名前を、ってあんたもしかして蘭？」

蘭「ああ――！」

蘭が自分のしでかした過ちに気づいた。

園「ちよっと、あんたどうして小さくなってるの？それにそっちの二人は、まさか大阪の二人組み？」

ついでに平次たちのこともばれた。

蘭「あ、あのねこれには深いわけが。」

蘭はなんとか取り繕うとするが。

園「ちよっと待って。蘭やその二人が小さくなっているってことは、まさかあのガキンチョ（コナンの事）は新一君だったりして――」

さすがというかなんというか、とにかくこういうことには鋭いようだ。

園「ねえ、どうなの蘭？」

蘭「いや、あの。ああ、どうしてこうなるのよ――！」

こんなことをやっていたもんだから、結局彼らが警視庁にいくことはなかった。

さて一方。黒の組織（正確にはその残党）の襲撃を受けた警視庁は、上へ下への大パニックになっていた。それは捜査一課も例外で



なかった。

目「一体何が起きているんだ？」

混乱する目暮警部。そこへ、千葉刑事が部屋に走りこんできた。

千「大変です！ やつら、組織の連中が警視庁に侵入しています！  
！」

目「何！ 機動隊が周りの警備をしていたのではないのか？」

千「それが、やつらは機動隊の警備指揮所を襲いました。隊長は殉職、その他の隊員にも死傷者が出ています。とにかく、機動隊は命令する人間がいないので完全に烏合の衆になっています。」

どうやら組織の連中は無闇に攻撃してきたわけではないらしい。

巨大な組織というものの弱点、指揮系統の混乱を狙ったらしい。

と、こんどは一人の警官が目暮のもとへやってきた。

「目暮警部！ 警視庁全体の臨時指揮をお願いします。」

これにはその場にいた全員が仰天した。

目「な、何だって。なぜ私なんだね。もっと上の階級の者はおらんのか？」

「はい、上層部の幹部は現在首相官邸の対策本部へ出向しており、また他の警部より上の階級の方も全員出払っていて。」

目「なんてことだ。木島警視も明智警視も真下警視もいないのかね？」

目暮警部が知っている上司を手当たり次第言うが。

「はい。」

警官から帰ってきたのは素っ気無いこの一言であった。彼は腹をくくるしかなかった。

目「わかった。私が指揮をとる。それではまず、全員に拳銃携帯と防弾チョッキの着用を命令する。それと、けが人の救助だ。後、詳しい状況を知りたい。無線機を。それと米花町にむかったSATを呼び戻してくれ。」

「わかりました。」

こうして、目暮警部の指揮の下、警視庁側の反撃が始まった。

ちょうどそのころ正面玄関では、警官隊と組織の戦いが行われていた。まず、組織のほうは対戦車ロケット攻撃と手榴弾を投げ込み、正面からの強行突破を図った。一方の警官隊は、なんとかその攻撃を乗り切った者たちが拳銃で反撃した。しかし、形勢は圧倒的に警官達に不利であった。まず、警官達は生存者数名による反撃であったのに対し、組織側は十数人による全力攻撃であったからだ。次に使っている武器も違った。警官達がばんばんとしか撃てないニコーナンプ拳銃であるのに対し、組織側はダダダと撃てるカラニシコフ小銃であったからだ。警官隊は次第に追い詰められていった。

「畜生、一発撃つと10発は帰ってきやがる。」

一人の警官がそう悪態をついた。

「がんばれ、すぐに応援がくる。」

そばの仲間が声をかけるが、気休めにしかならない。

その時、一人の長身の男が一人悠然とこちらに歩いてくるのが見えた。

「撃て、撃て!!」

警官達はその男に集中射撃するが、当たっていないのか、それとも当たっても効いていないのか相手は平然としている。そして、その男はおもむろにコートの下から小銃を出すと、撃ちまくった。

「ぎゃああ!!」

さすがにこれには警官達も悲鳴をあげた。

「やつはターミネーターか？」

確かにそんな感じがする。結局、この言葉が引き金となったのか、警官隊の恐怖心が倍増した。そして。

「だ、だめだ全く葉がたたん。全員撤退だ！！」

こうして、正面玄関は突破され、組織の構成員たちは警視庁内になだれ込んだ。

## 警視庁での決戦 前編（後書き）

最後の、ターミネーターと言われたのはもちろんジンです。

## 警視庁での決戦 中篇

組織の構成員（厳密に言えばその残党）は、警視庁の中へなだれこんだ。その先頭を進むのはジンであった。

ウ「兄貴。ここは俺達が抑えるんで、兄貴は先へ行ってください。」

ジ「おう。悪いなウオツカ。じゃあ頼むぞ。よし、おまえらは付いて来い。」

後ろから来るであろう敵への防戦をウオツカに任せ、ジンは半分の部下を連れて上の階へ向かった。

一方、捜査一課では。

「け、警部、正面が突破されました。れ、連中は上の階に上がってくる模様です。」

無線に張り付いていた警官が叫ぶ。テロリストが近づいている恐怖からか、その声は震えていた。

目「くそ、仕方が無い。全員、すぐに行って応戦だ。何としても止めるんだ！」

「了解！！！」

目暮警部の命令とともに、捜査一課の刑事達が次々と出て行く。

ちなみに、捜査一課は6階にある。

一方、目暮警部は別室に向かった。そこには、今回捜査に協力するために来ていた小五郎と本山の二人がいた。

小「警部、さっきの音は何っすか？」

小五郎が先程聞こえた爆発音が何であつたかを聞いた。

目「毛利君、本山さん。連中、組織の人間と思われる連中がここに攻撃を仕掛けてきた。」

小「何ですって!!」

驚く小五郎。一方の本山は冷静に言った。

本「やはり、そうですね。では先程の爆発も。」

（連中が離反者への追及に厳しいとは分かっていたが、まさか警視庁に直接来るなんて。）

さすがにそれは本山も考えられなかった。もつとも、彼の考えは連中が未だ組織の一員であるという前提であつたが。

本「それで状況は？」

目「あまり良くない。連中は警備指揮所を爆破した。それで機動隊員に死傷者が出ている。そして正面入り口でも銃撃戦が起こって突破された。やつらは上の階を目指して上ってきている。このままではここもあぶない。君たちは身を潜めていてくれ。」

しかし、ここで予想外の事態が起きた。

小「警部殿、自分も何かいたします。」

小五郎がとんでもない事を言う。

目「毛利君、馬鹿言うんじゃない。君は今は民間人だぞ。」

小「しかし、目の前で先輩や元同僚が戦っているのに、自分だけが安全圏にいるなんて出来ません。たとえ警部殿が止めても自分はいきます。」

（へえ、工藤君は毛利さんの事をへっぽこ探偵なんて言っていたけど、やるときはやるようだな。）

本山は小五郎を少し見直した。

目「わかった。だが君に拳銃は持たせられんからな。とりあえず

防弾チョッキは貸してやるからそれを着たまえ。」

小五郎の強い意志に、ついに目暮警部が折れた。

小「有難うございます!!」

小五郎は敬礼すると、部屋から出て行つた。

目「まったくあの男は。それでは本山さん。私も行きますので、くれぐれもこの部屋から出ないようにしてください。」

本「はい、目暮さんもお気をつけて。」

そして、目暮警部も出て行ってしまった。部屋には本山一人だけが残された。

しばらくすると、散発的に銃声が響いてきた。

本「始まったな。」

ぼつりとそうつぶやく。しかし、銃声は聞こえるものの、一向に近づいては来ない。どうやら刑事達がんばって押しとどめているようだ。さらに、時間が経つにつれ銃声が遠ざかるようにも感じれた。どうやら刑事側が押し戻しているらしい。それとも……

（両方が撃てなくなる状況に陥っているか？）

後者の意見ははつきり言えば悲観的といえる。つまり両方に大きな犠牲が出ていることになる。

本「いかんいかん、前向きに考えねば!」

そう独り言を言つて自分を奮い立たせようとする。しかし。

（何だ。急に寒気が!）

体が締め付けられるような感じが彼を襲う。

（まさか、組織の人間が!）

そんなはずはない、と思いつつも彼は急いで武器を探す。

本「あつた!!」

証拠として持ってきた拳銃が机の上に置きっ放しとなっていた。

急いでそれを取る。幸運にも弾は全弾入ったままだった。スライドを引き、初弾を込めいつでも撃てるようにする。そして、身をかがめた。

しばらくして、誰かが近づいてくる気配がした。それを裏付けるように、実際に足音もしてきた。刑事や警官は皆防戦のため下へ行つたはずだ。警察の人間ではない。しかも、その近づいてくる人物は直感的に組織の人間とわかる。

ドアを少し開け、廊下を見える。そして、見えた。黒服の長身の男が。

（ジン！！）

最悪の相手である。そして。

バーン！！！！

ジンの銃が火を噴いた。

本「くそ！！」

本山も撃ち帰す。

銃撃戦はしばらく続いたが、どちらともいったん発砲を止めた。

そして、本山は自分の銃に起きている事態に気づいた。

本「やべ！」

残った弾は一発だけであった。

本「どうする！！？」

彼が混乱していると、予想外の事態が起きた。

ジ「おい、そこにいるのは本山だろ！！答えろ！！」

ジンが話しかけてきたのであった。





**警視庁での決戦 中篇（後書き）**

ジンが本山に話しかけた理由とは？  
次回後編 ご期待を。

（話だと？）

本山はジンの言葉に少し困惑した。なぜ、今話しかけてくる。何かの策略か？と思ってしまう。しかし、取り敢えずここは乗ってみる事にした。もっとも、話すと言っても、直接向かい合ってなどという馬鹿なこととはもちろんせず、扉に身を隠したまま話しかける。

「ああ、そうだ。俺だ、本山だ。」

「ふん、やはりお前か本山、いや組織の仲間同士だ、ワイルドキャットと呼ばせてもらおうか。」

「けっ、そんな堅苦しい名はもう忘れたわ。」

ワイルドキャットとは、本山の組織でのコードネームだ。コードネームは最初に所属した支部によって違う。日本なら酒。フランスなら爬虫類。そしてロシアなら昔の戦闘機であった。

「そうだったな、お前らのところは確かコードネームを使ってなかったな。」

ジンの言葉に、かつて津島所長が言っていた言葉を思い出す。

「いいか、そしきはコードネームなんていう堅苦しいもの使っているが、俺たちは一人一人人格を持った人間だ。それに、どうせたった5人の所帯だ。だから、本名で呼び合おう。」

と、そこで本山は意識を再び現実に戻す。

「ところでジン。俺も聞きたい。なぜここ（警視庁）を襲った？」  
もっとも気になることであつた。

「俺たちは組織から見捨てられたんだ。」

「何!？」

「組織は日本支部の閉鎖を決定したんだ。俺たちはもはや巢を失った鳥だ。もしかしたら組織に追われる身かも知れない。」

「だったらもうこんなことする必要ないだろ!! 投降しろ。」

自首を勧めるが、ジンにその気はないらしい。

「ふっ、今さらそんなことしてなんになる。俺はどうせ死刑になるしかないんだ。」

「ジン、お前はなんでそこまでしてきたんだ? お前ほどの頭が良いやつが、なぜ?」

本山にはジンがなぜそこまでするのか理解できなかった。

「お前には絶対わからねえだろうが、ただ一言言えば、護るべき者のためと言っておくか。」

「護るべき者だと?」

「ああ。……ふ、俺はそれを護るためなら悪魔に命を売って良いと思った。だが、それも終わりだ。さ、俺はもう充分話した。決着つけようか。」

ジンの言葉に、本山は最後にもう一度言う。

「ジン、自首しろ。これ以上やってもなんにもならないだろ。」

「ふ、何を今さら。」

その一言で、本山は説得は不可能だと悟った。

「さ、勝負をつけようぜ。」

しかたなく、本山も覚悟を決める。最後の一発、これをどうジンに向けて撃つか。相手との距離は5mあるかないかだ。必中距離と言って良い。充分ジンの命を奪える。だが、最終的に相手を殺すのは銃ではない。それで狙い引き金をこめる自分の意志である。そして、彼は盾にしていた扉から身を乗り出した。

パン！パン！

乾いた銃声が2発。ほぼ同時に響き渡った。

「うー！」

本山は倒れこんだ。弾は彼の腹に命中していた。一方のジンも左手に弾を受けていた。しかし、ジンは未だ立っていて、まだ片手を使って銃を使うことが出来た。

「ち、畜生。」

一方の本山は完全に戦闘不能だった。

「勝負あったようだな。」

ジンが冷酷な笑みを浮かべ言った。そして、落とした銃を拾う。

確かに、もはや本山に打つ手はなかった。仮に体が無事でも銃は弾切れになっているのだから。絶体絶命とはまさにこのことであろう。と、その時彼の目に、希望の光が差し込んだ。

「ジンよ、そうあせるな。冥土の土産にサッカーを見せてくれよ。」

「サッカーだと？」

「そうさ、一人の小さな名探偵のすばらしいプレイをな。」

ジンは本山の言っていることの意味を悟り、後ろを振り返ろうとした。

「やれ、工藤君!!」

そう本山が言った直後、いつのまにかジンの後ろに回りこんでいた新一が、キック力増強シューズの威力をMAXにしたキックをジンにお見舞いした。

「ぐは!!」

ボールの直撃を受け、ジンの体はいうに3mは飛んだ。

「見事だ工藤君。」

本山が賞賛の声を上げる。一方、吹き飛んだジンは何とか意識を保っていた。そして、新一の方を見る。

「お前は、毛利探偵事務所にいたガキ。お前が工藤新一だったのか。あの時、死んでなかったのか。」

「ああ、もつともおめえに飲まれた薬のおかげでこうなっちまったがな。」

「ふん、あの時毛利小五郎といっしょにやっておけばよかったな。組織の事をかきまわっていたのも、シェリーをかくまっていたのもお前だな。」

ジンは全てを悟った。

「ジン、もう終わりだ、自首しろ。」

本山と同じことを言う新一。だが。

「それはお前の正義だ工藤新一。だがな、正義は決して一つじゃない。これは覚えておけよ。」

「何。」

「だが今回はお前の正義が勝った。お前の正義になら、あいつらのことも任せられるかな。」

「あいつら？」

「すぐにわかる。それじゃあ、後を任せたぜ。」

そう言つて、ジンは右手で服に隠し持っていた小型拳銃を頭に突きつけた。

「やめろー!!」

コナンと本山が同時に叫んだが、遅かった。

パーン!!

ジンは引き金を引き、次の瞬間彼の頭を弾が撃ち抜いていた。即死であつた。新一にとっては最悪の光景、二度と見たくなかった光景である。

「ジン・・・」

本山がぼつりとつぶやいた。まるで幻を見ているように。

「そんなの・・・そんなの有るかよ!!!!!!」

新一の叫びが虚しく警視庁内に響いた。

一方、一階での戦いも終局を迎えつつあつた。

「ウオツカ、これが最後のマガジンだ。」

「おう。」

仲間から銃のマガジンを受け取り、それをつける。警察との戦いはいまだ膠着していた。しかし、それも弾が尽きれば終わりである。この少し前、組織の刺客からと思われる狙撃で3人が死んでいた。ベルモットはそいつらをひきつけると言つて出て行き、残つた仲間はいない。

「これが俺たちの運命かな。」

ふと自分らしくない言葉をつぶやいてみる。そして、彼は自分達を包囲する警官隊に銃を向けた。

「くそ、やつらまだ撃ってくるぞ、SATはまだか。」  
「まだです。」

包囲する警官隊は相手への決定打がなく、事を先へ進められなかった。

「どうすりゃいんだ？」

誰かがそう言った時。

「下がって、下がって。」

「え!？」

振り向いたとたん、数人の男が走ってきた。

「自衛隊!」

それは重機関銃を持った自衛隊員であった。

「あんたら、ここは警視庁だぞ!」

「首相命令です。テロリストを強制排除せよ。」

「何だと!」

その言葉を見無視するように、自衛隊員は準備をする。

「大和、武蔵、信濃。準備いいか？」

「準備完了です。山本隊長。」

「よし、目標発砲中の敵。よい、てえ!!」

命令と共に、射手が引き金を引く。そして、先ほどまで警官が撃っていた拳銃とは比較にならない轟音を立て、弾が飛び出した。自衛隊が制式採用しているM2重機関銃は70年近く使われている銃だが、毎分750発の発射能力と、12.7mmの口径、そしてコンクリートを打ち抜く破壊力は、組織の残った者をこの世から消し去るのに充分だった。その銃撃が終わった時、組織側からの反撃



は一切止んでいた。そして、そこに動く者の姿も消えていた。

警視庁を震撼させたテロリスト（黒の組織）の襲撃は、警察側に死者10名、負傷者50名。組織側に死者9名、負傷者2名を出して終わった。

**警視庁での決戦 後編（後書き）**

最近書く時間がありません。次話はずっと先になりそうです。  
感想ください。

## 米花港にて 前編

警視庁での戦いは終わったが、まだ捕まっていない組織の構成員がいた。ベルモットである。そのベルモットは、ロシア支部から回されてきた刺客を引き付けるため、逃げていた。しかし、それももう限界だった。乗ってきた車の燃料がなくなっていた。既にタンクの針は0を指し、赤ランプがついている。

「ここまでね。」

数ヶ所あった警察の検問を強行突破しながら、とにかく組織の刺客をまこうとしたが、それももう無理であった。

車はいつのまにか米花町に入っていた。とにかく、車や人の少ない道を走った。そして、車は港の倉庫街を抜け、埠頭に出たところで力尽きた。

ベルモットの車が止まると、組織の刺客たちの車は、少し距離を置いて止まった。

ベルモットは慎重に車の外に出た。その途端、相手も外に出て撃ってきた。ベルモットは車を楯によけようとしたが、後ろにあったコンテナに当たった跳弾がひざに当たってしまった。もちろん、それで無事なはずがない。彼女はその場に倒れこんだ。

「まいったわね。」

と強気で言ってみるが、もはや状況は絶体絶命である。もし、相手がこっちにやってこればもう逃げ場はないからだ。

護衛艦みらいCIC（戦闘指揮所）

さて、そんな光景を沖合いから見ていた人たちがいた。東京湾警備のために出動していた海上自衛隊護衛艦みらいである。

「艦長、左舷側の埠頭、距離500にて銃撃戦を確認!!」  
見張りを行っていた乗員から緊急の連絡が入る。

「何!!」

艦長の梅津が驚きの声を上げた。

「艦長、もしかしたら自衛艦隊司令部から連絡のあった。」

「いや、まだわからん。もっと詳細に報告せよ。」

砲雷長の菊池をさえぎり、梅津は情報を求めた。

「埠頭にいるのは5人。男4人の女1人。このうち4人組が女を追いつめているようです。それと、本艦には気づいていない模様。」

「通信室、ただちに警視庁と陸上自衛隊に現状報告せよ。」

新たに入ってくる情報に、梅津は冷静に対応する。

「それと、海鳥を呼び戻せ。あと、陸戦隊は乗艇準備。」

梅津は万が一に備えた。しかし、その備えを実行する機会は直ぐに来た。

「警視庁より連絡。警視庁より米花町方面へ逃走したテロリスト1名あり。女性の模様。なお、それを追求した車両あり。」

「!!」

「決まりですね。」

菊池が静かに言った。

「陸戦隊は直ちに上陸せよ。内火艇降ろせ。それにしても、警視庁から随分早く情報が入ったな……。ああ、たしか首相命令が出ていたか。」

この少し前、情報の流れを円滑にするため、自衛隊、海上保安庁、警察に対し特定周波数の無線使用命令が出ていた。

「海鳥、後5分で上空に到着。ならびに、陸戦隊発進します。」  
現状が報告される。

「これで、大丈夫でしょうか？」

菊池が言う。それは梅津も同じであった。なにせ、初めての实战なのだから。そこへ、また報告が入る。

「艦長、急いでください。今にも銃撃戦が起きそうです！」

「海鳥の到着は？」

「後4分。」

（とても間に合わない。それなら。）

「主砲戦用意！目標左舷90度、仰角零度！」

米花港にて 前編（後書き）

分量が少ないのはお許しください。何分テスト前なので。

## 米花港にて 後編

（主砲戦だど！！）

艦長の言葉に、菊池のみならず、その場にいた全員が口には出さなかったが驚いた。通常主砲は艦艇、対空、対地目標に使うものであつて、しかもそれらとの距離は普通1000m以上離して使う。それを対人相手に使おうと言う艦長の意図が全く読めなかった。

「砲弾は礼砲用の空砲を使用！！」

「えー！！」

礼砲とは、外国の港などに入る時、挨拶として撃つ空砲のことである。

「まさか私が実弾を使用するとも思つたか、砲雷長。」

菊池は梅津の意図を悟つた。

「急げ砲雷長、時間がないぞー！！」

その言葉に、菊池はハツとした。

「アイサーー！！（了解）主砲戦用意！！目標左舷90度、仰角零度。砲弾は空砲を装填せよー！！」

「アイサーー！！」

菊池の命令に砲塔担当の乗員が復唱した。そして、直に前甲板の127mm主砲が左に旋回した。ちなみに現代の砲は、中は無人でCICと呼ばれる管制室から操作される。

「撃ち方用意よろし！」

「撃ち方、始めー！！」

「撃ち方始めー！！」

一方、埠頭では。

「ふふふ、ついにベルモットを追い詰めたぞ。」

組織の刺客のリーダーは笑いながらそう言った。

「では、殺りますか？」

部下の1人がそう言ったが、リーダーはそれを止めた。

「まあ待て。奴にはもう少し恐怖を味わってもらおう。人間って言うのは死ぬまでの間が一番怖いらしいからな。」

その時であつた。

ドーン！！

沖合いで盛大な爆音が轟き、閃光がほとばしった。

「何だ?!」

「た、隊長。軍艦です。ヤポンスキーの軍艦です。」

部下がそう言ってる間も、みらいからの砲撃が断続的に続く。

「どうします?」

「うーん。撃っているのは空砲のようだが、これ見よがしにこつちに砲身を向けているってことは既にこつちに気づいているな。仕方ない、予定変更だ。とつととベルモットを殺してずらがるぜ。」

と、リーダーはそう決めたが遅かった。いきなり彼らをまぶしい光が照らした。

「何!?!」

「何だあれは!?!」

そこにいたのは、みらい艦載機の海鳥であつた。この機体。主翼の向きを変えられる可変翼機で、ヘリコプターにもなるし飛行機にもなるという優れた性能を持っていた。ちなみに、まだほとんど普及していないから、彼らが驚くのも無理はない。

「ただちに武器を下ろし投降せよ!」

海鳥から日本語、英語、ロシア語、中国語等で同様の警告がなされる。

「撃て!!! 拳銃でも当たりどころによつちや撃墜できる。撃て、撃て!!!」

何を思ったか、彼らは拳銃で攻撃を始めた。



一方、撃たれた海鳥では。

「こちら海鳥。攻撃を受けました。反撃の許可をお願いします。」  
機長の佐竹一尉がみらいCICと連絡をとっていた。

「みらいCICより海鳥へ、反撃は許可するが、相手は絶対傷つけるな。」

梅津からの返答が入る。

「反撃は許可するが人命は尊重せよですか。」

前席の射撃手である森三尉がため息交じりで言う。

「仕方ないだろ、自衛隊は軍隊じゃないんだからな。それよりも、反撃するぞ、20mmバルカン砲視認照準装置接続。」

「アイサー、接続。目標はどうしますか？」

「そうだな、赤外線で確認する限り車には誰も乗ってないようだから、車を狙え。」

「アイサー。」

森三尉は照準を車に合わせる。

「照準完了。」

「ファイヤー!!」

「ファイヤー!!」

森三尉が引き金を引く。それとともに、機体下部に取り付けられた20mmバルカン砲から砲弾が発射され、寸分の狂いなく命中した。そして、車は大爆発を起こした。

「しまった。燃料タンクに当たったな。」

一瞬、佐竹一尉に不安が走ったが、直ぐに4人の姿が確認できた。  
「ふう。良かった。」

「佐竹一尉。陸戦隊が上陸します。」

「おう、俺たちの仕事はここまでだな。」

佐竹一尉はそう言うと、眼下に向けて敬礼した。

一方、撃たれた4人は。

「本当に撃ちやがった。やむえん。ベルモットは後回しだ。ここは一端撤収。」

と、撤収に掛かろうとしたが。

「た、大変です。自衛隊がこっちに来ます。」

見ると、20人ほどの銃を持った男達が走ってくる。

「ち、畜生。ヤポンスキーマーカークーメ。逃げる!!」

4人は逃走に入った。

「尾栗、お前達は逃走した連中を追え。俺は女のほうの武装解除に向かう。いいか、銃は使うなよ。」

「分かってるぜ洋介。」

みらい副長兼陸戦隊隊長の角松は、ベルモットの方へ向かった。ベルモットは、倒れながらもまだ拳銃を握っていた。角松は、そんな彼女に小銃を向けながら英語で言った。

「It's over down your weapon (勝負はついた。武器を下ろせ。)」

ベルモットはそれに対し笑みを浮かべた。

「OK」

そして、拳銃を投げ捨てた。

「こちら角松。女性の武装解除を確認。」

角松がみらいへ向かって報告する。そして、この直後に、尾栗からの全員確保の連絡が入った。

コナンと、合流した快斗がパトカーに乗って到着したのはその40分後のことだった。既に、ベルモット達は連行された後だった。

「あーあ、なんか良い所自衛隊に取られたような気がする。」

新一が愚痴をたれた。それを、快斗がなだめた。

「まあ新一、なんであれ連中は捕まっただんだし。」

「ああ、日本支部には随分と資料が残ってたらしいし。多分どんな芋づる式に捕まっっていくことになると思うぜ。」

「そうだな。けど、俺の戦いはまだ終わらないぜ。パンドラが見つかるまでな。」

そう快斗が言った時だった。

「ほーう、君達パンドラを知っているのか。」

「……！」

振り返ると、自衛官が立っていた。

「え、おじさんパンドラを知ってるの？」

新一がコナンモードで言った。

「ああ、知ってるどころか、見たからな。なんせ、俺たちの船にあるから。」

その言葉に、快斗の口はしばらく閉まらなかった。

「おい、尾栗。子供相手だからって防衛機密を言うんじゃない！」

後ろから角松が注意した。

「ああ、って何で子供がここに……！」

やっと気づいた。

「警視庁の方の話じゃ今回の事件解決に深く貢献したそうさ。さ、俺たちは行くぞ。」

そして、二人は行ってしまった。ちなみにこの数カ月後、防衛庁の研究施設にキッドが潜り込み、まんまとパンドラを盗み出すことになる。ちなみに、防衛庁はその秘密がなぜ漏れたか調査したが、その時にはみらいがミッドウェイ沖で行方不明となっていたため、結局真実をつかむ事は出来なかった。

新一達はこの後帰って恋人達から大目玉を食らうこととなった。しかし、事件が終わった安堵感から、皆の表情は明るかった。全員が喜んだ。しかし、事件は終わってなかった。



米花港にて 後編（後書き）

まだ事件は終わっていません。次話ではまた事件発生です。

## 最後の戦い 前編

色々あったが、取り敢えず黒の組織の脅威もなくなり、解毒剤の見通しもついた。新一はこれで枕を高くして眠れる。一ヶ月もすれば元の体に戻れ、蘭とともに帝丹高校に復帰できるものと思っていた。しかし、最後の最後に試練は待ち受けていた。

さて、米花港から戻り、恋人達にどやされながらも、新一と快斗は深い眠りについた。翌日は平日だが、別に小学校を一日ぐらい休んでも問題ない。だから彼らは昼まで寝る気満々だったのだが、その希望は翌日恋人達の声で打ち砕かれた。

「・・・一。起きてよ新一！」

蘭の声に、新一は目を覚ました。（なんだか以前とパターンが似ている）

「うーん、なんだよ蘭。もう少しゆっくり寝かせてくれよ。」

「もう、とにかく起きてよ。大変なことになったのよ。」

蘭の態度が尋常でない。それを読み取った新一はとにかく、事態を把握しようとする。

「いったい何があったんだ？」

「実はね・・・」

この一時間ほど前。米花警察署。

留置場に入られている人影があった。昨日捕まった黒の組織の残党、ラオチユウであった。ちなみに、スネイクは負傷したためここにはいない。

そのラオチユウがふいに彼の監視をしていた警官に向かって喋り始めた。

「ねえ、今何時ですか？」

「うん？7時を過ぎたぐらいだが。」

警官が腕時計を見ながら言った。

「そうですか。」

そして彼はクククと小さく笑った。

「何だ？」

「後五時間。」

「は！？」

警官が驚きの声を上げた。

「後五時間で最後の仕掛けが始動する。そうならば・・・」

「何！！け、警部！！！」

警官は慌てて上司を呼びに向かった。

「つまり、やつらが最後に何か仕掛けをしていたと？しかも今日の12時に作動するってことか。」

「そうみたいなの。」

蘭から説明を受け、ため息をつく。また厄介ことが増えてしまった。

「まったく・・・あれ？」

新一はあることに気づいた。

「他の皆は？」

家の中はあまりに静かだった。

「黒羽君と服部君は阿笠博士に車を出してもらって警察署に行ったわよ。青子ちゃんたちも。哀ちゃんは自分の部屋で寝ているわ。」

なるほど、どおりで静かなわけだ。しかし、その静寂を破るように、携帯が鳴った。新一は画面を見てみる。

「服部からだ。もしもし。」

「おお、工藤起きたんか？>

「ああ、ところで話なら蘭から聞いたぜ。」

<そりゃ話が早いわ。実はな昨日捕まったあいつ、ラオチュウってコードネームらしいんやけど、暗号を出してきよったんや。そこに

書かれているところが目標らしいで。>

「暗号!？」

この二文字に、新一の血が騒ぐ。

「一体どんな暗号なんだ？」

<それはすぐにメールで送るで。今俺と快斗で解いとるんやけど、まだ答えは出とらんからな。どっちが先にとくか競争や。じゃ後でな。>

そして平次は一方的に電話を切った。

「服部のやろう、一方的に切りやがった。」

と、新一がぶつくさ文句を言う中、メールが届いた。

内容はこんな感じであった。

これが暗号やで

天皇（換） 短（音） 文（記）      これを続けて読む      ヒント

地名。

わかつたら連絡してや。

であった。

「新一わかる？」

蘭が覗き込みながら言った。

「とりあえず地名って言っているからな。蘭、地図を持ってきたくれ。」

「わかつたわ。」

しばらくして、蘭が地図を持ってきた。

「はい。」

「サンキュー。」

そして、地図と暗号を見ながら考え込む。しかし、直ぐに明るい表情になった。



「なんだ、簡単じゃねえか。」

「新一、分かったの？」

「ああ、これは………というふうに分かった。だから正解は、………って、これって!!」

「う、うそ。」

新一と蘭は絶句した。導き出した場所は、二人のよく知っている場所であったのだから。

5分後、米花警察署

「なんやて、目標は帝丹高校やって!？」

平次たちの絶叫が響いていた。

## 最後の戦い 前編（後書き）

暗号の解き方がわかった方はご一報ください。

## 最後の戦い 中編（前書き）

前回の答え

天皇（換）は、同じ意味の言葉にかえるで帝。  
短（音）は同じ音の字にかえるで丹

文（記）は記号に変えるで地図記号の高校  
つなげて帝丹高校

## 最後の戦い 中編

「おまえらが仕掛けをしたのは帝丹高校だろ、違うか？」

取調室に尋問の声が響く。もちろん尋問を受けているのはラオチユウだ。新一達からの報告を受け、米花署の岩倉刑事が尋問に掛かっていた。

ちなみに、なぜ快斗と平次が新一に先を越されたかというところ、これは単純にラオチユウの暗号製作能力の低さにあった。例えば、最初の換にしても、いくらでも解釈できる。だからはっきり言えば、あの暗号はかなりいいかげんな暗号であった。新一が先に解けたものも、自分の住んでいる近くと目星をつけ、地図を見たからであった。ちなみに、快斗たちは一から解こうとした。それで考えすぎってしまったのだった。

さて話は変わるが、解いたのに何ゆえ尋問しているかと言うと、はつきり言えば、推理した本人もかつて言ったが、どんなに上手く推理しても、もしかしたら間違えがあるかもしれない。推理は決して推測の域を出ない。100パーセント合っているなどというのは、確認するまでありえない。だから、こうして最終確認が必要なのだ。

最初岩倉刑事は、ラオチユウが黙秘するかもしれないと考えていた。しかし、その予想は裏切られることとなる。

「ああ、そうだよ。」

簡単に認めた。

「ほう、認めるか。だったら学校のどこに仕掛けたか？ 一体何を仕掛けたか白状してもらおうか？」

「場所と言えんが、物は言ってもいいぜ。核だ。」

その言葉に、岩倉刑事は一瞬意味が分からなかった。

「かく？ もしかして、………原爆の核。」

「そうだ。」

「そんな馬鹿な。だって原爆って普通B29ぐらいの大型爆撃機に積むもんだろ！？それにどこで手に入れたんだ？」

そんな岩倉刑事の言葉に、ラオチュウは馬鹿にするように言った。「あのね刑事さん。それは60年前のリトル・ボーイ（広島の実爆）やファットマン（長崎の実爆）の話だよ。いいかい、あの2発が4t近くになったのは、放射線漏れを防ぐ外壁と、気圧で爆発するよう仕掛けた信管によるものなんだぜ、破壊力の源であるプルトニウムは1kgにも満たなかったんだぜ。進歩した現代の技術なら、トランクケースでも核爆弾にできるぜ。」

手に入れた場所はロシアだ。あの国の核管理はソ連崩壊後目茶苦茶だったからな。」

「・・・・」

ラオチュウの言葉に絶句する岩倉刑事。まさか核とは予想できなかった。

「じゃあ、おまえらが仕掛けたのは一体どれくらいの破壊力なんだ？」

「そうだな・・・・広島ほどはいかんだろうが、しかしなにぶん東京は平野。だから爆風や熱線を妨げる物が無いからな。広島なみ、もしかしたらそれ以上の被害になるかも。」

そこまで言ったとき、岩倉刑事がラオチュウにつかみかかった。

「おまえ、数万の人間を危険にさらしてよくもそんな平然と！」

「俺たちにはもう帰る場所が無い。裁判にかけられれば確実に死刑だ。だったら、もうヤケクソだ。」

そう言って、ラオチュウは黙り込んでしまった。

「くそう、これだからヤケクソな野郎は困る。何をするかわかったもんじゃない。おい。」

岩倉刑事が部下に声をかける。

「はい？」

「すぐに帝丹高校に連絡して職員と生徒を全員すぐに避難させろ。」

それから、帝丹高校から半径5km以内の交通の封鎖。住民の避難、あとまだ残っている自衛隊にも出動要請を出せ。」

「刑事！それは越権行為も甚だしい。しかも、避難させるにしても数万になります！」

部下がいさめようとするが。

「馬鹿野郎！！やるんだ！！」

こうして、米花署は上へ下への大パニックとなった。

そのパニックを横に見ながら、快斗と平次たちは。

「俺たちも行こうぜ。」

「「「おお！！」」」

と、いざ帝丹高校へ、

行けなかった。なぜなら。

「帝丹高校へ行く！？だめです。絶対にだめです。」

話を聞いていた警官に止められたからだった。

そのころ、新一と蘭は。

「蘭！振り落とされるなよ！！」

「ええ。」

スケボーで帝丹高校目指していた。

## 最後の戦い 捜査開始編

警察から連絡を受けた帝丹高校では、生徒の避難が、・・・・・・  
・滞っていた。なにぶん、核が仕掛けられたから避難しろなんて  
言える筈無い。つまり、生徒避難の口実を教師達が決めかねていた  
しかし、そんなことをしているうちに、次々とパトカーが集まって  
きた。

「何だ何だ？」

生徒たちが慌てだした。一方、やって来た警察の刑事たちに教師  
が応対するが。

「何やっているんですか！何故生徒が避難してないんです？」

刑事の第一声はこれであつた。

「そうは言いますが、なんと行って避難させれば良いのですか？」  
確かに。

「なんでも良いから、早く避難させてください。」

既に時間は10時を回っている。

こうして、ようやく生徒の避難が開始された。その一方で、帝丹  
高校には続々と警察や自衛隊の車両が集まってきた。そして、新一  
と蘭の二人もやって来た。

「なんかすごいことになっているわよ新一。」

「ああ、なんで自衛隊まで。」

と、そこで新一はある人を見つけた。

「あ、佐藤刑事。」

警視庁の佐藤刑事であつた。

「あ、工藤君。それに蘭さん。」

「佐藤刑事、この騒ぎは一体？」

「え！工藤君知らないの。」

佐藤刑事は半ばあきれた、暗号を解いた本人が何を仕掛けられた  
かわかっていなかったのだから。そこで、佐藤刑事が説明した。

「か、核！！」

佐藤刑事の話に、ただの爆弾と思っていた二人は啞然とした。

「そうなの、だから自衛隊も来ているんだけど、肝心の爆弾がまだ見つかっていないからねえ。」

「じゃあ早く見つけないと。」

「それはそうなんだけどね蘭さん。まだ生徒の避難が終わってないの、しかも捜査する人手も足りないのよ。」

佐藤刑事によると、ここ二日の捜査で、多くの警官が動員されており、深刻な人手不足をきたしているという。

「じゃあ俺たちが手伝います。」

新一の言葉に佐藤刑事が慌てる。

「ちょ、ちよつと工藤君。いくらなんでもそれは。」

なにせ今回は相手が原子爆弾である。危険度が高すぎる。しかし、新一はそれに臆する様子はまったく無かった。

「今までだつて何回も危険な目に遭ってきました。けど、乗り越えてきました。」

「そうです。それに目の前で友達が危険にさらされているのに黙っていられません。」

蘭も強気である。もつとも最初新一は一人で来るつもりだった。

しかし、蘭はついて来た。蘭にしてみれば、新一を一人で行かせるのは嫌だったからだ。彼女の脳裏には、トロピカルランドでの悪夢が未だつきまとっていたのだ。ちなみに、新一は蘭に

「命を懸けることになるけどいいんだな。」

と聞いた。それに対し蘭は、「ええ、それに事件は新一が解決してくれるでしょ。」と言い切っていた。新一もそこまで言われては、置いて行くことなど出来なかった。そして、佐藤刑事もついに折れた。

「わかったわ。他の人には私から連絡しておくわ。」

「ありがとうございます。」

二人がお礼を言った。



と、そこで新一の電話が鳴った。

「服部からだ。もしもし。」

「おお、工藤。今どこにおるんや？」  
平次からだ。

「え、帝丹高校だけど。」

「そうかい。こっちは警察に足止めされてしもつて、行けそうにな  
いんや。」

平次の残念な声が伝わってきた。

「工藤、俺はいけんけど、しっかりやれや。」

「ああ。」

「あ、あとそこに姉ちゃんいるんなら、しっかり守るんやで。」

最後にそう言つて、電話は切れた。なんと平次は蘭が新一について  
いったのがわかつたらしい。人間自分の恋には疎いが、他人の恋  
には敏感らしい。

「全く、あいつ。」

「何だつて？服部君。」

蘭が電話の内容を聞いてきた。

「気をつけろだつて。」

新一は内容をぼかした。

「さ、二人とも行くわよ。」

佐藤刑事が二人を呼ぶ。

「はい。」

二人は、校舎に入つて行つた。ちなみに、この姿を生徒の誰かが  
見たらしく、後に帝丹高校には、小学生が学校を救つた、という逸  
話が残ることになる。

## 最後の戦い 発見編

帝丹高校内の搜索が始まった。警官、自衛隊が必死になって探す  
が、見つからない。

「こちら栗田土長、地学室発見できません。」

「こちら南雲巡查長、社会科教室、発見できず。」

「こちら牟田口三曹、音楽室、発見できず。」

搜索中の警官や自衛官からの報告が、指揮所に入ってくる。現在  
指揮は、米花署の田中警部が最上級階級者で執っている。本当なら、  
爆弾処理班の隊長が警視で指揮を執るべきなのだが、こういう経験  
がないということ、田中警部が執っている。

「見つからない。」

田中警部がぼやく。すでに9割方の部屋を調べたというのに、発  
見の報告は入らない。

「後50分しかありません。」

部下が時計を見て報告する。時間的余裕から、15分前に発見さ  
れない場合は、全員安全距離に退避するよう命令されている。

「うーん。」

時間は刻一刻とせまっている。

一方、コナンたちも困っていた。

「ないね、新一。」

「まずいな。」

新一が腕時計を見ながら言う。

「ねえ工藤君、蘭さん。どこか思い当たりそうな部屋ない？」

佐藤刑事が新一達に尋ねる。

「うーん……。」

新一は考え込む。しかし、半年ほど離れていたためパツと思い出  
せない。と、そこで蘭が何かを思い出した。

「そういえば、最上階に普段は人が入らない小さな部屋があったよ  
うな。」

それに驚く二人。

「何!!」

「それどこよ!!」

「確か、4階の中央。」

「急ごう。」

そして3人は走り出した。

一方、指揮所の田中警部もなんと同じ場所に気づいていた。

「この小さな部屋は何だろう?」

「あ、それは時計の機械室です。」

部下の1人が答えた。

「機械室?」

「ええ、校舎に埋め込まれている時計です。」

「そこは人が普段入るのか?」

「いいえ。年に二回、業者が整備に入るだけだそうです。」

田中警部は瞬時にここだと思った。

「校舎4階搜索中の警官にこの部屋に行くよう命令してくれ。」

「自衛官も回しましょうか?」

自衛隊側の司令、木村3尉が申し出た。

「お願いします。」

こうして、警官と自衛官も4階にある時計の機械室に向かった。

「ここか。くそ、鍵が掛かってる。」

新一たちは機械室に着いたが、もちろん鍵がかかっていた。

「鍵を持っ てきてもらいましょ。」

「いや、大丈夫です。」

そう言っ て、新一は何かを取り出した。

「博士が作っ た何でも開けーる。こいつを使えば。」

そして、すぐに鍵は開いた。

「すごい。」

「すごいわね新一君。」

と、誉めている間に、他の警官や自衛隊員も集まっ てきた。

「おお、君達も来ていたのか？」

そんなやりとりが交わされている間に、新一は腕時計で中を照らした。今回、新たに作っ てもらっ た蘭も同じく照らす。中は時計を動かすための歯車などが所狭しとあっ た。そして、その奥に、あっ た。二つの大きなジュラルミンケースである。

「あっ た！！」

「何！見つかっ た！でかした！！」

田中刑事が部下から発見の報を受けた。

「はあ、しかし問題が。」

「問題だと。」

「はい、機械が邪魔して、とても中に入れません。」

その報告に、指揮所の空気は一変した。

「何！なんとか出来んのか！？」

「無理です。解体していたら1時間以上かかります。」

もう40分程しか残っ ていない。無理な相談であっ た。

「小柄な警官なら入れんか？」

「無理です。子供でないと、こんな狭いところ。・・・子供？」

そこで、田中刑事も子供がいた事に気づいた。

「そこに、江戸川君がいるか？（一応、彼らは江戸川コナンという

名前で認識されています。加えて、警視庁から無制限捜査活動の自由も許可されています。」

「江戸川です。」

無線機に新一が出た。

「やれるかい？もちろん指示はこちらからするが。」

その言葉に、新一は自信満々に言った。

「やれます。」

## 最後の戦い 解体開始編

新一達は爆弾の解体に挑むべく、機械室に入った。今回、どのように解体するかというと、まず新一達が入る。その時、蘭がカメラを持って行く。そして爆弾の映像を外の爆処隊長に送り解体方法を指示してもらい、工具箱を持った新一が解体する。という手順だ。

新一と蘭は仕掛けられた大型のジュラルミンケースに近づく、そしてまず新一が持たされたガイガーカウンター（放射能検知器）で放射線を測る。針はほとんど動かない。放射線は漏れていないようだ。

「放射線漏れはないようです。」

持たされた無線機で連絡をとる。

「ようし、では解体を始めようか。」

「はい。蘭、いいか？」

「もちろん。」

そして、解体に取り掛かった。

ジュラルミンケースが二つ並んでいる。片方が核で、もう一方が時限装置のようだ。それを蘭がカメラで写す。

「右が時限装置だ。そっちを開ける。」

爆処隊長からの指示が来る。新一達は言われたとおりにする。開けると、確かに時限装置だった。

新一はそれをライトで照らし、蘭は持たされたカメラで中を撮る。

「左隅のネジで止められた小箱を開ける。」

新一は工具箱からドライバーを取り出し外していく。

「坊や、ジャガーノートって言う映画知ってるか？」

突然、隊長がそんな事を聞いてきた。

「いいえ。」

「爆弾の映画でな、解体していくと、最後に赤と青の二本のコードが残るって話だ。」

そう隊長がいい終わった時、箱が開いた。中を見ると、カラフルな7本のコードが。

「こっちは7本ありますよ。」

「グレードめちゃくちゃたけえじゃん。」

確かに高い。

「よし、お嬢ちゃん。もっとカメラを近付けてくれ。」

「はい。」

蘭がカメラを近付ける。どうやら、配線の配置をしっかりと見極めたいようだ。そして、しばらくして指示が来る。

「まず、緑を切れ。」

こうして、解体作業が始まった。そんな風に現場が必死になっているころ。

「なんですと帝丹高校を爆撃するですと!!」

声を上げたのは松本警視正である。ちなみに、ここは警視庁に近い警察署。現在警視庁が昨日の攻撃で使えないため、その機能の一部を疎開させていた。

「そうだ松本警視正。」

そう言うのは小田切警視長である。

「しかし、解体作業は始まったそうです。なんで？」

「首相命令だ。もし、5分前に解体が終わっていなかった場合、まず海上の護衛艦からミサイル攻撃し校舎を破壊。そこへ航空自衛

隊が気化爆弾とナパーム弾で爆撃し、核物質もろとも全てを焼きつくす。」

「しかし、それは犠牲を前提としているじゃないですか!？」  
確かに、核は防げても、気化爆弾やナパーム弾による被害は避けえない。

「仕方ないんだ。大を守るために小を犠牲にする。これが上の判断だ。」

そういう小田切警視長の言葉も、悲壮を帯びていた。

「しかし、そんなことって。」

「我々は公僕だ。上の命令には従わねばならん。ただ、何故この事を君に言うか、その意味を理解してほしい。」

そう言って、彼は行ってしまった。

「私に言う理由……まさか!」

「ええ!!ここを爆撃する!？」

田中警部からの連絡に佐藤刑事が素つ頓狂な声を上げた。

「そうだ佐藤刑事。今本庁の君の上司から連絡があった。それだ、今解体はどれくらい進んでいる?」

「さつき4本目のコードを切りました。」

「そうか、なるべく急がしてくれ。後12時まで20分しかない。」

「わかりました。」

佐藤刑事は無線を切り、新一たちにこのことを伝えようと思った。



一方、自衛隊による攻撃準備は着々と進んでいた。すでに、百里基地を飛び立った気化爆弾爆装のF15戦闘機と、ナパーム弾爆装のF4戦闘機は米花町に近づきつつあった。また、海上の護衛艦もハーブーンミサイルの照準に帝丹高校を捉えていた。

## 最後の戦い 解体開始編（後書き）

注意！校舎の時計の機械室という設定は、作者の考えで、原作では確認できません。

## 最後の戦い 決断編

爆弾「厳密にはその時限装置」の解体は順調に進んでいた。すでに指示を出す爆弾処理班班長にも、解体する新一達の下にも爆撃計画の事は伝えられていた。そのため、解体が急がれていた。

「ようし坊や、次は黒のコードだ。」

「黒ですね。」

新一が黒のコードを切った。

「ようし。坊や、後何本残っている？」

「後2本です。赤と青」

隊長が映像を見ると、確かに青と赤の二本が残っている。

「またべたな。まあいい。ようし、その内の一本が最後だろうから後少しだ。お嬢ちゃん、カメラをもつとよせてくれ。」

「はい。」

蘭がカメラをコードに近づける。

「ようし。……うん!？」

爆弾隊長が声を詰まらせた。

「どうしました、隊長？」

そばにいた部下が声をかける。

「わからん。」

「え!？」

その言葉を聞いていたほぼ全員が声をあげた。

「この二本はほとんど同じように繋いである。カメラ越しに見ただけでは、いや実際目の前で見てもらわかんぐらい上手く作つてある。」

隊長の額に冷や汗が流れる。それは現場の新一と蘭にも言えた。

「ちょ、ちよつとどうしよう新一？」

あせる蘭。

「あせるな蘭。冷静さを失ったら終わりだ。」

さすが新一、しつかりとわきまえている。だが、時間が迫っているのも事実であつた。

「隊長どうするんです？爆発まで20分、爆撃予定まで15分を切っているんですよ！」

「うーん……一瞬のうちに蒸発か、それとも煉獄の炎に焼かれるか。」

その言葉に全員の顔が蒼くなる。

「縁起でもないこと言わないでください警視！」

佐藤刑事が声を荒げる。確かに縁起でもない。

「ああわかつた。しかし、どつちかな？以前あつた爆弾事件でも青と赤のコードが残つて、感で赤を切ったら正解だったか。」

自分の経験を持ち出す隊長。しかし、すぐに蘭の声が無線に入ってきた。

「けど私が5月に米花シティビルで爆弾解体した時は、青を切りましたけど……」

「うーん……」

悩む隊長。そうしている間にも刻一刻と時間は過ぎていく。

「爆撃予定まで10分を切りました。」

警官の1人が怯えるように言う。もう時間がない。現場で指揮を取っていた田中警部は決断した。

「必要最低限の人員を残し全員直ちに近くのビルの地下室に退避せよ。」

命令と共に、手空きの者は学校から我先に脱出する。そんな中、佐藤刑事は動かない。

「佐藤刑事、君も行くんだ。これは上官命令だ。」

田中警部が促す。しかし、彼女の返事はただ一言。

「いやです。」

「佐藤君!!」

「私はあの子達を最後まで見守る義務があります。」  
しばし睨み合う二人。

「さすがに警視庁内で名の通っている刑事だけはあるな。いいだろう、だが命の保障は無いんだぞ。」

「わかっています。」

最終的に残ったのは新一と蘭、佐藤刑事、田中警部、そして爆処隊長であった。

一方、新一達かというと。

「新一、間に合うかな？」

「……」

蘭が恐る恐る聞いてみるが、新一は答えない。

「し、新一。どうしたの？」

「……」

蘭がもう一度聞いてみるが、やはり何も答えない。その時、突然外から轟音が響いてきた。

「何!？」

「何だ!？」

爆処隊長が声をあげる。

「じ、自衛隊だ。自衛隊の戦闘機だ!」

「隊長!早くなんとかして下さい。」

田中警部と佐藤刑事が隊長をせかす。爆撃隊が爆撃前の予行飛行を行ったのだ。もう時間がない。

「そんなこと言っただって、下手な判断をして起爆させてしまったら。」

隊長も焦り始めた。しかし、実際爆発したらそれこそ未曾有の悲劇を招くのは必定なのだ。成功するのは確率的には二分の一だが、それは失敗するのも同じ確率であるということなのだ。

「どうすればいいんだ……」

そこへ、新一達から交信が入った。

「隊長さん。」

妙に落ち着いた声だ。

「なんだ？坊や？」

「俺に全部任せてくれますか？」

**最後の戦い 決断編（後書き）**

久しぶりの投稿です。

## 最後の戦い 解決編

「何だつて？あの少年が自分に全部任せると？」

新一の言葉を聞いた田中警部が声を荒げる。

「そういうことです。」

佐藤警部がさらりと言う。

「無茶だ！あんな歳の子にやらせるなんて。警視庁が認めているか知らないが、そんなこと許可できない。」

田中警部が激昂する。それに対し、爆処隊長はだまつたままだつた。そして、おもむろにマイクに向かって言った。

「坊や……君にまかせる。」

「隊長！」

田中警部が信じられないというような表情をする。

「どうせ俺が指示した所で同じなんだ。だったらあの少年と少女に賭けてみたい。」

「し、しかし……」

なおも彼は食い下がろうとするが。

「警部。一応俺の方が上官だ。俺の命令に従ってもらう。＜隊長の階級は警視です。＞」

上官権限を出されてしまつては、田中警部は黙るしかなかった。

「大丈夫さ、彼はいい目をしていた。あらゆる困難を乗り越えるような目だ。きっとやってくれるさ。」

「そうです、あの子達ならきつとやってくれます。」

新一達の正体を知っている佐藤刑事も賛成した。こうして、彼らは全てを一人、いや二人の少年と少女の手にゆだねた。



「新一、本当にやるの？」

蘭が不安な表情で聞く。

「ああ。」

「けど、もし失敗したら、私達……」

蘭はその先のことを言えなかった。もつとも、新一は彼女が何を言おうとしたのかちゃんと分かっていた。

「大丈夫さ、失敗しなきゃいいんだ。……なあ蘭。5月の米花シティビルでのこと覚えてるか？」

「ええ。」

「あの時俺は言っただろ、死ぬ時は一緒だって。もし解体に失敗しても、蘭と一緒に俺に悔いは……」

そこまで言った時、蘭が新一に抱きついた。

「ら、蘭!？」

「お願い……。そんな事言わないで。私達は助かるよ。だって、新一は迷宮無しの名探偵で……」

最後の方は言葉になっていなかった。どうやら、彼女が泣いてしまったらしい。さすがに、新一も己の言葉の過ちを感じずには要られなかった。

「ごめん蘭。そうだよな、俺たちは絶対成功させるんだ。それに、俺にはやらなきゃいけないことがあるし。」

「やらなきゃいけないこと？」

「お前を待たせた事と今回の事件に巻き込んだ事への償い。今回

の事件を片付けたら思いっきりサービスしてやるからな。」

「ありがとう、新一。」

そして再び蘭は新一に抱きついた。

しかし、そんな良い雰囲気をぶち壊すように、無線が入る。

「おい、君達。大変良い雰囲気な所申し訳ないけど、会話が垂れ流し状態だよ。」

隊長の声だ。

「「え!!!」」

どうやら無線の送信がそのままになっていたようだ。  
真っ赤になる二人。

「いやー、若いつて良いですな警視。」

「そうだね警部。」

「熱いわね、二人とも。」

最後の言葉は佐藤刑事だ。二人はさらに顔が赤くなるのを感じた。  
一気に場の緊張が解けた。

「ま、お熱いのは構わないが、坊やもう本当に時間がないぞ。」

「わかってます。切る方は決めました。」

「よし、後は頼んだぞ。」

新一は工具をコードに近づける。成功を誰もが祈った。蘭が両手を合わせ、目をつぶった。その場を再び緊張が支配する。

「切ります!」

そして彼はコードを切る。切ったのは、あの時と同じ。青のコードであった。臨界は起こらなかった。沈黙のみがその場を包んでいた。

「坊や！大丈夫か？」

無線から隊長の声が入り、新一はハツとする。

「あ、切りました。」

「異常はないか？起爆装置は止まったか？」

その言葉に、新一と蘭は起爆装置を覗き込む。ディスプレイの数字は………止まっていた。解体成功だ。

「や、やった。成功です。解体は成功です。」

こみ上げてくる嬉しさを押さえ、新一は無線機に向かって言った。

「本当か？間違えじゃないのか？」

隊長が念を押す。

「間違えじゃありません。成功です。」

そして、無線機の方から佐藤刑事達の歓声が聞こえてきた。

「ようし、よくやったぞ坊や。後は俺にまかせろ。」

そして隊長は無線機の周波数を調整する。解体は無地終わったとはいえ、まだやる事がある自衛隊の攻撃を止めさせねばならない。

「こちら帝丹高校臨時指揮所。爆弾解体は成功した。繰り返し、解体は成功した。よって、直ちに攻撃を中止してください。」

この解体成功はかなりあやうい物であった。既に海空両自衛隊は

攻撃に入ろうとしていたからだ。

「こちら隊長機。これより爆撃進路に入る。全機投弾用意。」

F15を長機とする編隊は、今まさに帝丹高校への爆撃を行わんとしていた。そこへ、緊急無線が入った。

「こちら百里基地司令部。攻撃隊は直ちに攻撃を中止せよ。繰り返す。直ちに攻撃を中止し帰投せよ。」

帰還命令である。

「了解。全機へ、攻撃は中止。帰投する。」

「了解！！！！」

攻撃隊は一斉に翼を翻した。

同じ頃、東京湾上の護衛艦にも攻撃中止命令が届いていた。

「艦長、護衛艦隊司令部より作戦中止命令です。」

「回頭180度。横須賀への帰投進路につく。」

「宜候！」

こうして、自衛隊の攻撃は中止された。

解体成功を聞いて、避難していた警察や自衛隊が次々と帝丹高校へ戻ってきた。起爆は止めたとはいえ、爆弾自身は未だ残っているから、彼らはその撤去作業にかかるのだ。もっとも、新一達にはもはや関係ないが。

「おめでとう工藤君、蘭さん。あなた達は英雄よ。」

校舎から出てきた二人に、佐藤刑事が笑顔で出迎えた。

「「ありがとうございます。」」

「さ、車に乗って。私がみんなの所へ送るわ。」

二人は佐藤刑事の車に乗り込んだ。

## 最後の戦い 解決編（後書き）

ようやく爆弾解体が終わりました。次回、もしくは次々回に最終回を予定しています。乞うご期待。

## 新たなスタート

帝丹小学校 1年B組

「みんな、おはよう。」

「おはようございます。」

小林先生の朝の挨拶に、子供達が元気な声で返す。

あれから一週間たった。新一は忙しい一週間で過ごすこととなった。警察の取調べや、正体を隠していた毛利夫妻や目暮警部らに謝って回るなどしていたからだ。

黒の組織はあの3日間であつという間に崩壊してしまった。日本支部の精鋭達は捕まるか、警察や自衛隊との戦いで命を落とした。部下を見捨て逃げようとしたあの支部長も、船で国外逃亡しようとした所を、海自のSS707潜、うずしおに船ごと拿捕されてしまった。

その後、警察や公安が組織について必死の捜査を行ったが結局、組織の全貌は分らずじまいであった。今回、ちょうどキルシュのアメリカへの移送中で日本にいなかったFBIの面々は、日本警察から協力を得て、ついに黒の組織のボスを割り出した。その人物は現代のハワード・ヒューズとも言うべきある大企業の会長で、ジョー・デュークが彼に会おうとした。しかし、面会直前に彼はピストル自殺してしまった。残された遺書には、自分が黒の組織のボスであり、遺産を組織の被害者への救済金に当てて欲しいとしか書いておらず、組織の最終的な目的や、生い立ちは全く分からなかった。

もっとも新一には、もはやそれはあまり関係ない話であった。彼にとってはこれからの方が大切であった。

哀が一ヶ月で出来ると言った解毒剤は実際少し遅れても2ヶ月あれば出来る見込みがたった。これも、あの組織から逃げてきた本山の協力のおかげであつた。

ちなみに、彼は調べた結果特に犯罪そのものに関与した形跡はなく、銃刀法違反のみで済みそうであつた。そして哀も今のところ警察から特に犯罪者としての追及はない。目暮警部の話では、彼女に関する資料が今のところ見つかつて無いからだという。最も、罪にとわれても、恐らく妃弁護士がその辣腕を振るってくれるだろう。

そんな事を新一が考えていると、小林先生が言つた。

「はい、それでは皆さん。今日は皆さんにお知らせがあります。今日からうちのクラスに新しい仲間が加わります。親御さんの都合で短い間しかいられないけど、皆仲良くしてあげてね。」

「はい!!」

「それじゃあ入ってきて。」

小林先生に呼ばれ、一人の女の子が入ってきた。小林先生が彼女の名を黒板に書く。

「毛利蘭さんです。」

「毛利蘭です。みんなよろしく。」

そう蘭であつた。解毒剤がすぐには出来ないため、とりあえず彼女らも帝丹小学校に入ることになったのだ。書類などはどうしたかわからないが、阿笠博士がなんとかしたようだ。ちなみに、彼女が本名なのは、別に偽名にする必要がないからだ。

ところで、彼女らと書いたとおり、入ってきたのは彼女だけではない。実は、平次やなんと快斗らまで帝丹小に転入していた。もつとも新一とは別のクラスだが。

彼らはあの後取り敢えず親御さんらに事情を説明したのだが、自分達がしばらく戻れないとわかると、なぜか解毒剤ができるまで米



花町にいたと言いだしたのだ。言いだしっぺは平次のようなだが、どうやら新一といれば事件に巻き込まれると思っただけ。快斗も似たような事情だろう。もちろん、和葉や青子も一緒だ。ちなみに、彼らはとりあえず工藤邸に居候する事となった。新一も工藤邸に戻るから、かなりにぎやかな生活になるだろう。

新一は楽しみだった。これからの生活が。確かに組織とかかわったことで多くのものを失ったが、また多くのものを彼は得ていた。彼はその得た物を精一杯楽しんでいこうと考えていた。

一つの崩壊（BREAKDOWN）があらたな出発（START）になった瞬間であった。

## 新たなスタート（後書き）

ようやく完結です。ここまで読んでくださった皆さんに感謝します。また、自分の考えに付き合ってもらったキャラたちにも感謝。本当にありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4917a/>

---

BREAKDOWN

2011年8月11日22時11分発行